投入盛花寫真圖說全

11
254

始

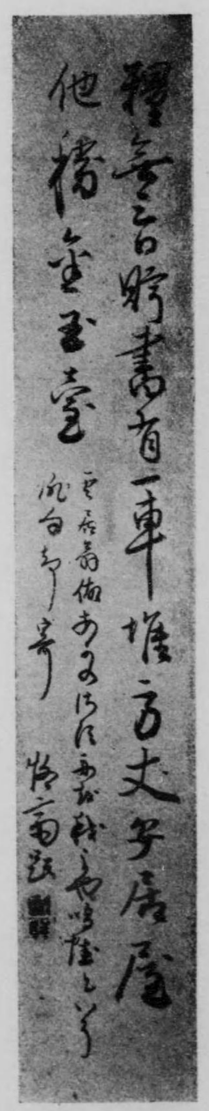
11-254

宋周鑑

投入盛花寫真圖說

大正
6. 6. 5
内交

初代恰翁の挿花



近藤正一翁は趣味の人なり、家代々花道の宗師を以て知らる、翁夙に斯道に一見地を持し、その花道觀は全く流俗のそれと撰を異にす、仍ち繩墨を離れ格法を脱し、自由の天地に逍遙するを以て瓶花觀賞の要粹となせるものの如し、翁の挿花が常に清新渾熟にして一種の高風ある、ゆゑなきに非ざるなり。

頃日翁の新著『投入盛花、寫眞圖說』を携へ來りて余に序を求めらる、蓋し此著は投入花と盛花の眞諦を說明せるものにして、幽遠の理想と玄妙の奥祕を平易簡明に記述し、何人にも容易にその要旨を了解悟得せしむるを目的とせる好箇の著作なり。

行文に趣味横溢し、加之も大自然の玄機を捕へたる所に禪味の隱見するあり、或は之を花道禪と名くるも不可なからんか。

若夫卷中收むる所の瓶花圖に至つては、翁が年來挿める所を撮

影せるものにして、洒瀟なるものあり、豐艶なるものあり、高潔なるもの、閑寂なるもの、その千態萬様にして變化窮りなくしてその趣味の盡きざる狀、眞に一篇の無聲詩に對するの感あるを覺ゆ。

惟ふに本書の如きは之を不朽の好著として、その流風餘芳長へに人を醉はしむるの泉たるべきを信ぜんとす。

牡丹挿して落欵したく　おもひけり

大正六年晩春日　長流閣主　玉堂識

後庭に掌大の栽園あり、萱草咲き胡蝶花開き玫瑰花匂ふ、早起その數朶を取り新水を灌ぎて案頭の銅瓶に挿む、露滴々として落ち清高の風韻坐間に動く。

淡紅の花、青白の花、不用意に高低し、淺綠黄綠の嫩葉縱横に交錯する所まことに無限の情趣に富めるを覺ゆ。

蓋しこの自然にして、些の作爲なき挿法は、投入瓶花の眞諦にして全く繩墨の外に立つものと謂はんか、挿花觀賞の情味は深く這の裡に味ふを要す。

大正六年首夏　著者

目次

はし書……一
投入花……一
投入花の起源及び沿革……三
投入花の趣味……一五
大自然の挿花……一五
法則に泥まぬ面白味……一八
作意なき眞の風情……二一
投入花の姿と形……二八
梅は梅らしく……三三
不易の眞變化の相……四一
不易といふこと……四一

姿に變化あること……四九
投入花の挿し方……五六
定規を設けず……五六
意匠次第……五八
繪を描くが如し……五九
花に去嫌ひなし……六四
趣味を一致せしむること……六七
枝を矯めず葉を透さず……六八
定れる花形なし……七一
花の据り枝葉の振り……七三
花の取合せ……七五
花の高さ……七九
一種挿……八三
一種挿の風情……八七

交ぜ挿……八九
その趣味は多く豐麗なり……八九
一種挿よりも孤寂なる交挿……九〇
高低參差は挿法の秘事……九一
草花の交挿……九二
春の草花の交挿……九四
夏の草花の交挿……九七
秋の草花の交挿……一〇〇
晩秋の草花の挿方……一〇四
冬の草花の交挿……一〇六
草と木の交挿……一〇七
一輪挿……一一六
非常に大きい花……一一八
一輪挿の花器……一二一

裝飾と瓶花との關係……一二二
掛物と瓶花の調和……一二四
如何なる掛物にも調和する花……一四一
瓶花と置物の調和……一四六
その趣味の調和すること……一四七
大小の釣合……一五〇
高低の釣合……一五一
色の調和……一五五
床の間と花……一五六
瓶花季寄……一六三

盛花

盛花の起原……一六七
盛花の變遷……一六七
盛花の趣味……一六八

盛花器……一七七
盛花の盛り方……一七九
盛花の姿……一八二
畫を描く心持……一八五
水を入れる器と入れぬ器……一八七
日本風の盛花と歐風の盛花……一八九
盛花の取合せ……一九一

花道逸話

石上の白百合……一九六
小座敷の糸垂櫻……二〇三
牡丹一輪……二〇三
三齋の意匠……二〇四
……二〇五

眞塗の手桶に牡丹……二〇六
宗珠の苦言……二〇七
片桐石見の風流……二〇八
籠花入に薄板を用ふ……二〇九
宗和の物數奇……二〇九
瓢箪の花器に蠶豆の花一すぢ……二一〇
一輪の牽牛花……二一一
小堀遠州の作意、石川某の誤解……二一二
風情を第一……二一三
天室和尚遠州の花を評す……二一四
挿花は水門に石を入るゝ心持……二一五
珍花を賞する心持……二一六
梅花は多く、菊花は寡く……二一七
綰柳の古意……二一八

孝以法師の花道訓……二一九
俳人樵可翁の風流……二二〇
春尚寒き一莖の菜の花……二二一
豫樂院公の見識……二二二
花器の銘……二二三
机上の梅一枝……二二四
扇面に盛れる桃の一枝……二二五
硯蓋に牡丹一輪……二二七
酒壺の櫻花……二二八
時雨に逢へる櫨紅葉……二二九
坐右の銅瓶に紅葉の一枝……二三一
武藏の壺……二三二

目次

終

投入盛花寫眞圖說

近藤正一著

投入花

挿方に法則を用ひず

挿法に規矩を設けず、花の姿に一定の形式を作らずして、唯自然のまゝに無雜と花瓶に挿けるのを投入れと申します、隨てこれを挿けるのにも又その花の止方にもこれといふ形式などは絶對にありません、即ち花止等は用つても使はないでも、そんな事には全く頓着しないのです。

勿論花道といふ廣い意味の上から申しますれば、投入花でも流儀花でも、盛花や水盤に水を湛へて花を浮かせる浮花でもです、素と花の趣味を

観賞するといふのがその目的ですから、花の止方などは如何でも可いのです、唯挿け上げた花の姿が面白く、そして趣味にさへ富んで居るやうに出來ればそれで可いのです、だから總ての挿花といふものは、この投入式に行りたいのです、然しそれを挿けるに、便利上花止を使つたとても、それは別に差支はないといふのです。

投入花の大主眼

けれども既にその名稱を投入花といふのですから、在來の挿花の如うに花の止め方に形式を定めたり、その花の姿に掟を作らぬといふのが我投入花の眼目なのでありますで、その花の風情が表はれ、趣味さへ出來て參りますれば、折り取つた花を掴み挿しにしたのでもよい、要之花の趣味風情といふことを唯一の目的とするのがこの投入れの大主眼なのであります。

それには作意を用ひず、技巧を弄ばずして、草木の自然を全くせしむるといふことが肝要であつて、櫻や梅や松のやうな立派なものは云ふまで

花をして天然を樂ましむ

もなく、摘み取つて小花瓶に挿す野邊の無名草でも、その花が總てその天然を樂んで、花瓶にあるか野邊に在るかを忘れて居るかのやうな樣に挿すのが投入花なのであります。

根をたえてさゞれの上に咲にけり
あめにながれし撫子の花

といつた如うな狀が先づ投入挿花の風情だと申して差支ないと思ひます。

投入花の起源及び沿革

投入花は古し

投入花は隨分古い時代から行はれたもので、例の茶人の茶花や文人挿と世間で呼んで居る一種の自然式の花などのまだ世に行はれぬ以前から、投入れといふ名稱はあつたものであります。

勿論茶人花も文人花も、一種の投入には違ひありませぬが、それが昔の

投入れと同じものであるか如何かは一つの疑問であります、恐くはその間には幾分の距離があつたものゝやうに思はれるのです。

古昔の投入花には精い圖譜がありませぬから、これを後代の茶人花や文人花や、又現時流行して居る投入花と比較して、その相違の點を一々指摘することは困難でありますが、然し昔の日記や物語などに書いてある文章などから想像したり、又古い繪卷物に描いてある所に依て双方を比べて見ますと、確にその幾分の相違のあることを見出すことが出來ます。

昔の投入と後代の投入との相違點

一口に申しますと昔のはその風情が和暢として居りますし、後代のはコセ付いて居るといふ傾向があります、例へば昔の投入花は櫻かざして今日もくらしつゝと云つた大宮人の悠揚なるを見るやうで、後代のは胴服か十德でも着た世捨人を見るかのやうな感じがあります、即ち一方は優艶和暢の風情に富み、一方は閑寂幽雅の趣味を以て優れて居ると申して

可からうと思ひます。

作意なき自然花

それのみならず、後代の投入花でも、これを現今我等の行つて居る所のものに比較して見ますれば、これ亦幾許の相違は免れませぬ、それは槐記抄などに書いてある投入花の記事を見れば能く解ります、即ち名は同じでも細い所にはいろ〳〵異つた所があるのです、然し我等が今日行つて居る投入は、何れかと申しますと、後代の投入よりは却て昔の投入の方に委も風情も近いと申して可いかも知れませぬ。

彼の槐記抄に記してある投入花でもです、その少し以前の投入花とは其樣子の違つて居たといふことは、當時の挿花譜を見れば直ぐ解ります、而して又ズット古い所では、その瓶花の狀が全くの自然であつて、聊かも作意などを用ひた痕跡はありませぬ、もう眞の生のまゝのもので、木や草を折り取つて、それを其まゝ花瓶に挿して、而てその草木の自然の情味を觀賞したものであります。

露ながら挿せる女郎花の一株

古い時代には、例へば前裁の女郎花を折り取つて露ながら花瓶に挿したとか、盛りの櫻を折つて曲げも矯めも爲ないで花入に挿して座右に置いてその風情を愛でたといふ、……一時の感興に驅られて爲たのであつて、如何にその姿が天眞爛漫で、そして其無作意な自然の趣味の面白いことであつたかといふことを想像することが出來まする。

この天眞爛漫たる自然趣味の挿方が即ち我が流で主張する投入花であつて、美しいものは飽までも美しく、高潔なものは愈々高潔の感じを與へるのは、實にこの自然趣味の投入花に限るやうに思ひます。

平安朝の投入花

斯ういふやうに自然式？に花を自然のまゝに花瓶に挿けるといふことは、既に古く平安朝の頃から行はれて居たのでありまして、それは其時代の日記類や物語などに屢々書かれて居るのでも知られます、源氏の胡蝶の卷に

銀の花瓶に櫻をさし、蝶は、黄金の瓶に山吹を、同じき花の房もいかめしう、世になき匂ひを盡させ給へり、とありますし又同じ胡蝶の卷には、瓶の櫻少しうち散りまがふなどゝ見えて居りまする、それから又枕の草紙には

楊器に挿せる梅一枝

楊器にもらせ給ひて、梅の花さして月いと明かきに、これに歌よめ云々、

それから後撰集には

久しかれあたに散るなと櫻花
瓶にさせれとうつろひにけり

美趣瓶頭に溢る

などと詠んであります。

これらは皆我等の方でいふ投入花なのですが、その折り取つたまゝの美しい生の花を、何の作意もなしに金瓶や銀瓶に挿した樣は如何なに美しくあつたでせう、もう聞いたばかりでも一種の美趣を感じます、その艶美の趣味は、到底繪にも描くことの出來ぬ風情だと思はれます。

かういふ工合に、作意を微塵も用ひず、自然のまゝな挿方であるだけで

源流は落葉の下の小流

も、もう十分美趣は溢れて居ますのに、その花瓶との調和が又實に好いでありませんか、白銀の瓶に櫻、黄金瓶に山吹、殆んど絶美の取り合せでありまする、斯うなると艶なるは愈よ艶に、高潔なるは一層その高潔の情趣が現はれ來るのであります、我が流の投入花の極意は全く茲にあるのです。

で、若し投入花の淵源を祖述するとしたならば、起源は是非此邊に求めたいのですが、何も別に然ういふ古い所に緣を結びつけて難有味をつけやうとは思ひませぬ、又強て然んなことをして勿體をつける必要もないのです、流儀花のやうに、聖德太子が始め給ふたとか、挿花は草木を成佛せしむる爲に非情のものを有情の人體に象つて、合掌の姿を表して釋尊が作り始めたなどゝいふやうな附會說を立てやうとする爲にいふのではありませぬ、況て一歩また一歩とその源流を窮めて參りますと、落葉の下にさゝやく小流となり、岩間をしたゝる點滴となるやうに、何れをそれと云ふ起源はないのですが、どうしても前にいふやうな源氏や枕の草紙に

投入花を戒めたる槐記の言葉

書いてある時分の自然式瓶花の趣味や意匠などが、その源流の幾分を助けて居ることは勿論であると思はれます。

然し槐記抄に書いてある投入花といふものと、私等の主張する投入花とが少しその風體を異にして居るといふのは、その時分の投入花は多少の作意を用ひたばかりでなく、枝も矯めたやうですし、又葉をすかしたり花をもひねつたものらしい、一口にいふと今日の流儀花の方でする草體の花位のものであつたらしい、それはその時代の花の圖を見れば能く解ります、それに槐記抄にはかういふことも書いてあります。

大方の人投入花と云ふは、立花などの樣に、ためつゆがめつ入るゝことでなし、枝のなりで其儘に入るゝを、投入と云ふと覺えて居るは大なる心得違なり、(中略)

兎角生れつき花の高く葉のひきき者なれば何方にても、花を高く葉をひきく生くるが習ひなり、菖蒲は花より葉の高きもの、これが生れつき

なれば、何方にても葉を高く花を卑くする、是が違へば杜若が菖蒲になり、菖蒲が杜若になる也、よく〳〵心得べし云々。

これを見ても、此時代の投入花といふものは既に幾分の作意を弄びたる上に、出生といふ理窟に捕はれて多少窮屈な挿花であつたといふことは充分想像することが出來ませう。

流儀花よりは一歩自然に近し

が、流儀花が理窟詰一點張で、窮屈な不自然な、そして見るから厭味なものに比べますと、餘程その挿法は寛やかなものであつたものだと云ふことは、枝のなりで其儘に入るゝを投入花と覺えて居るは大なる心得違也といつて、それを戒めてあるのを見ても、その時代の人が餘り規則や法則の羈束を受けないで行る傾のあつたことが知られます。

これで見ますと、投入といふ挿法が始つたのは、例の流儀花の方が餘りに法則に泥んで、不自然で且つ沒趣味な挿方をするのが面白くないために、それに反抗して起つたものであることも能く分るのです。

流儀花を嘲る

花卉を賞觀する目的を忘失す

流儀花……殊に石州、遠州、宏道などといふ極端に技巧を弄ぶ流派の挿花が嫌味であることは、嬉遊笑覽に

遠州とは小堀宗甫の名を假りたるにて、もとよりあらぬ事なり、(石州も同じ)又宏道は袁中郎が瓶史より思ひよれる名なるべし、ます〳〵ひがことを極めたり、されども此等行はれて、さるべき人の好きもあれど、多くは下輩の慰となり、神奈川の宵みやに假閣の觀物に立つるをはれとす、枝を撓め奇狀を作り出すは見る目もいとはしけれど其わざは昔より巧みになりしにや。

とありまして、斯うなつては花も陋の極、卑の極で、花を挿けてその美を賞觀するの、花木の趣味を愛するのといふ優くて高尚な心術は微塵も見ることが出來ぬのです、けれども俗に云ふ世間は眼明千人盲目千人で、近代まで盛にこの流儀花が行はれて居たのであります。然し、少しにても見識のある人の間には、この流儀花といふものは全く擯斥されて、世間で文人花

と稱へます一種の自然式の磊落な挿法の瓶花や、閑寂な茶人風の挿花が觀賞されて居たのです。

流儀花に反抗して起れる茶花

茶人式の花といふのは、抹茶家が主として挿す所の極めて趣味のある佗の花です、紹鷗、利休などが足利時代に盛に行はれた流儀花に反抗して一種の見識を以て始めた……一寸見ると無茶苦茶挿かと見える程無雜と挿す花です、文人花といふのは畫家の竹田などが南宗畫の磊落な花鳥畫などから思ひ付いて創意した所の、矢張一種の自然式挿法を用ふる瓶花でありますが、この二者は共に趣味も深く雅致もありまする、が、然しそれを觀賞するといふ人は僅に茶人か文人雅客の一部に止つて、廣くは行はれなかつたものであります。

我投入花の鼻祖

然るに私の祖父三枝軒鶴洲が、如何も流儀風の花は卑俗で面白くない、何か趣味のある挿法がありさうなものだ、といふ考へから茶人花を研究したり、又文人風の挿方も行つて見たが、まだ如何も自分の心にこれなら

ばといふ氣に入つたものが出來なかつた、然し不完全ながら其考案を父の恪翁に傳へました、丁度これが文政の末、弘化の初めであつたのです。

恪翁の投入花研究

恪翁は爾來熱心に趣味のある挿花の研究に熱中して、文人風の挿花も茶人流の花も、それに池の坊、松月、遠州さま〳〵の方面に手を延して研究したのみならず歐風の瓶花……その頃は今のやうに外國人の家へ行つてその瓶花を見るなどゝいふやうなことは無論出來ませんで、僅に外國から來た油繪や水彩畫や板行物の繪の内に表はれて居る瓶花や盛花などに就てその趣味を探つたのです、恰も或る秋のことです、郊外を散歩して居て無端田舍の百姓屋の垣根によろ〳〵として痩せた捨て作りの白菊が二株ばかり咲いて居るのに眼が着いて、如何にもその風情の自然な所に見惚れて居ましたが、豁然として花道の妙諦は茲所であるといふことを發明して、今まで種々の方面の研究に腐心したのは、總て高嶺に達するまでの迂廻曲折に過ぎなかつたといふことに氣が着いたのです。

一枝の菊花投入花の妙諦を敎ふ

一種の有聲畫

斯う氣が着いて見ると花道といふものは、流儀花で云ふやうな偏狹なものでなく、自然界を横行濶歩して、自由自在に自然の美を樂むことの出來る所の一種の有聲畫であつて、無限の情趣悠久の理想を一瓶の内に寓することの得られる高遠な技であると悟つた、仍ち矢立を出して鼻紙に題した一詩が

欲窮挿花妙、須先問花神、秋草蕭索冷、春花艶妖新、區々何論法、各自現天眞

といふので、恪翁は此時から花風に一生面を開いて、今日の所謂恪翁流瓶花の基を定めたのであります。

といつて、元來が自然を宗として花の美趣を樂むといふのが眼目であります、勿論法則を立つるでなく、花形を極めるのでもなく、その姿は千變萬化であつて、所謂唯眞故に新といふのを我が花道唯一の憲章として花神に親んだのであります。

投入花の生命

土堤の蒲公英と岩陰の龍膽

投入花の趣味

大自然の挿花

投入花の趣味は其姿が全く自然的であつて枝や葉の組立方に少しも作意を用ひたといふ痕跡の見えぬといふ所にあるので、一本の枝でも一輪の花でも、モウそれが野原や花圃に自分の心のまゝに咲き出でたといふやうな風情に挿けるといふことが……挿けられた所が即ちその生命なのです。

梅にしても櫻にしても、また然ういふ立派な花でなく、土堤の蒲公英でも岩陰の龍膽の如うな稈細な草でもです、その自然のまゝの姿や風情が全然り瓶頭に現はれて、自分の身が野邊や山中に在るやうな心持になるといふことが大切であるのです、世間の流儀花のやうに、己れは挿花であるといつて威張つたやうな狀の挿方は投入れ花の方では絶對に禁物な

ので、然うなつてはもう投入れ花の趣味は全然零になるのであります。

圖に掲げたのは、朝顔一輪に薄一すぢ、極めて清楚淡白な、一花一葉とでもいひたい瓶花ではありますが、然しその風情は眞の自然で、何の作意もなく何の技巧もありません、只折り取つて、それを其儘に花瓶に挿したのですが、その花も葉も極めて寡い……一寸見た所では何だか物足らぬやうな感じのする所に又云ひ難き味が罩もつて居る積りです。

（正一花譜の内）

朝顔と薄の交ぜ挿

山高きが故に貴からず、花や葉を澤山挿したからとてそれで瓶花に趣味の添つて來るものではありませぬ、手前味噌のやうで可笑いか知らぬが、上圖の花などは挿け上げて、花の露がホロ〳〵と花瓶に傳はつて落ちる所には涼味滿室の感じがある積りです。

朝顔や一輪深し淵の色

蕪村

下圖は又秋の野趣を表はした瓶花であつて、野薔薇と薄と畫顔との挿し交ぜですが、その枝や葉が縱横に入り亂れて、薄の葉に野薔薇の蔓が絡らんだ所などは村の小流に沿ふた土堤などによく見る狀です、そして薄の葉蔭と野薔薇の枝の交錯した所に畫顔が、玆に一つ、彼所に一つと淡紅色の花

（正一花譜の内）

野趣を現はしたる一瓶

を見せて居ます、もう純然たる野趣で、何れが眞だの何れが根〆だのといふ、流儀花の方で云ふ役枝や、天地人などといふものは少しもありません、即ち法則もなければ規則もない、花も葉も自分の心のまゝにその天然を樂んで居るのです、法則に泥まないで自由自在に枝を用つた所がこの一瓶の特色なのであります。

法規は微塵もなし

法則に泥まぬ面白味

不立文字

禪家の言葉に不立文字といふがあります、あれは見性……悟を開くには區々たる字句の上の見解などを用ゐないで、直指人心見性成佛といつて、短刀直入直ちに佛の眞面目に接する、これが本統の悟道であると敎へたのであります、畢竟り文字の末を趁ふといふことは却つて悟りの妨げとなり又さういふやうに文字に依つて佛性を研究しやうとしても到底本統の佛性を知ることは出來るものでないといふ高い見識から文字の上の研究を避けたのでありますが、花道の方でも極意は尙且これと少しも異らぬのであります。

高き見地

花を挿けるに水面倒な規則を立てたり難い法式を造るのは、丁度悟道に文字の見解を立てるのと同じで、その結果は却つて花の趣味や生氣を殺ぐといふに了るに過ぎないのですから、その挿し上げた花は出生を誤つたり殺風景な……俗氣紛々たる厭味なものと爲ることを免れぬのです、だから投入花の方では全く法則に依つて花を挿けるといふことを避けるのを唯一の生命として居るのであります、乃ち投入れ花は風姿洒々落々として人工的の規則の外を歩む大自然の挿花と申しても可いのです。

俗氣紛々たるを免れず

區々たる規則を設けず

だから投入花の方では、流俗の花……例の流儀花の方で主張する所の天地人の規則だとか五行の方式だとかいふものはありませぬ、況して花の型を或る一定した形式的の鑄形に入れやうとするやうな窮屈なる行

天然の法則を無視せず

り方は絶對に爲ないのです、唯々高低參差として枝葉縱横に、疎密相倚つて風情の宜しきに適ひたるが何よりの眼目なのであります、

とは云ふものゝ全然法則を無視して花卉草木が持つて居る天然の法則までも破壞して無茶苦茶に花を花瓶に突き込むのが投入花の挿方だといふのではありませぬ、草木が生れながらに有つて居る規則は、何處までもこれを尊重するのです、梅はその稜々として、鐵を叩き曲げたやう枝上に白玉の花を點綴して、疎影横斜月黄昏といつたやうな氣高い所のあるのがその眞面目であり、又女郎花や苅萱のやうな野草を挿ける時は古人が、艶めき立てる女郎花と歌つた如く、なよ〳〵として風にも堪へぬかと見える優し味のある所が彼の風情であつて、そして又その天然であります。

自然の趣致を見逃さず

投入花の方では今いふ所の天然の持前までも無視するとは申さぬ、事ろこの自然の方則を決して見逃さないやうにする、卽ち之れは最も大切な事柄で、この天然の規則……情趣を巧く捕へ得るがために、その草なり木なりの風情を充分に瓶頭に寫すことが出來、そして又活氣もあり生命もある自然趣味の瓶花が出來上るのです、で若し投入花には何んな方則があると云つて聞かれたならば、今いふ所の天然卽ち草木の自然の出生を尊重するのだといふて答へるより外は無いのであります。

天然の風情を肝要とす

くれ〳〵も避けたいのは流儀花で行る所の、花の姿を一定した鑄型に入れることで、無闇に枝を矯めたり葉を透して草木の自然を傷つけるがごときこと、所謂無理をするといふことは、結局花の風情を破壞して俗氣の多い不自然な畸形なものを造り上げることに苦心すると同じであります。

作意なき眞の風情

前にいふやうに投入挿花の風情といふのは、草木が持て生れて居る自

然のまゝ卽ち彼等の天然の風情趣味をそのまゝ觀賞するといふのが眼目でありますから、何處までも自然式でやるといふことが肝要であります。

だから花の姿には微塵も作意を用ふるといふことを禁ずるのです、枝を無理に曲げたり肝腎な葉や花を截り落して、強て半月形や一種の畸形な花形に挿し上げやうとする行り口は、滿足なものを無理に不具者に爲やうとすると同じであるのです。

木陰の花

木陰の花の萎けて咲くのや籬に壓されて曲つた枝には一種の奇趣があります、一寸見ると不自然のやうな所もあるが然し、それは自然の不自然でありまして決し態と矯めたり透したりして作つたものではないのです、だから不自然のやうでも案外嫌味がない、場合に依つては大層それが面白く見ゆることもあるものです。

自然に厭味なし

これは畸といへば畸かも知れぬが、その畸は自然に背いて居るのでないのですから、見やうに依つては尙且一種の天然と申しても可いでせう、だから畸……不具の意の畸ではなくて、奇卽ち正に對しての奇といひたいのであります、其奇……曲つた枝や不自然のやうに見える變つた姿に嫌らし味のないのは全くそれが自然であるからのことだと思はれます、

厭味なのは作意を用ひたのです、もう既に花其ものが自ら――趣味を備へて、曲折も疎密も有つて居るのに、その上に更に人工で曲折を作るのであるから實に見られたものでありませぬ、猿猴が手を伸べたやうな狀に、桃でも柳でも、梅でも櫻でも、殆んど同じ狀に挿し上げた瓶花に何處に趣味がありませう、それも猿猴杉やレダマのやうな枝ぶりのものであれば兎に角、龍幹とさへ形容する老松や、槎枒たる梅の枝を矯めたり切つたりして強て畸狀を造らうとするのは、餘りに作意に過ぎる爲めに、勢い醜怪な瓶花となるのです、恁うなつては瓶花に清高な感じも優美な心も起るものではありませぬ、これは全く作意を用ふる過であります、徒然草

厭味は作意より來る

作意を用ふる過なり

日野資朝の覺醒

に、

此人日野資朝東寺の門に、雨やどりせられたりけるに、かたはものどもあつまりゐたるが、手も足もねぢゆがみうちかへりて、いづれも不具にことやうなるを見て、とりどりにたぐひなきくせものなり、もつとも愛するにたれりと思ひて、まもりたまひけるほどに、やがて其興つきて、みにくゝいぶせくおぼえければ、たゞすなほに、めづらしからぬ物にはしかずと思ひて、かへりて後、此間うゑ木をこのみて、ことやうに曲折あるものをもとめて、目をよろこばしめつるは、かのかたはを愛するなりけりと、興なくおぼえければ、鉢にうゑられける木ども、みなほりすてられけり、さもあるべき事なり。

とあるのは實に不自然なものや畸形な物には趣味がなく、そして見飽きのする嫌味なものであるといふことを能く穿つた記事であつて、俗流挿花の醜怪な狀を目のあたり見るやうな心持がするではありませぬか、この兼好の書いた所は慥かにこれを花道の上に移して金戒とするに足るだらうと思ひます。

作意は無理を作る

で、花は如何しても自然のまゝでなくては面白くありませぬ、乃ち彼等の天性を傷けぬやうに、聊かの作意も用ひないで挿るといふことは何より大切な事柄なのです、

作意を用ふる時は如何しても其處に、無理が出來ます、此處へ恁ういふ風に枝を出してとか、彼處へあゝいふ工合の葉を使つて、などゝいふ工風をしてかゝる時は、勢ひ枝を矯めたり葉を透したりするといふ不自然や無理を行らなければならぬことになります、無理や不自然が……少しでも花の上に現はれては瓶花は全然生氣を失ひます、生氣のない挿花に趣味などのあらう筈が無いから見るから厭味な……甚だしきは殺風景なものが出來上るのです。

これは畢竟作意を用ふる爲であるのですから、挿花には絶對に作意を

不用意の妙

避けよといふことを繰返して述べる次第です、挿花はもう曲もなく、作意もなく、唯何となくスラ〳〵と不用意に投げ入れた所に無限の情趣が籠り風情が溢れるものだいふことを悟ることが斯道の第一義です、世間に有り觸れた流儀花は兎に角、瓶花といふものは此處が本領であつてそして又挿花の生命であるといふことを忘れてはなりませぬ。

一體に作意を用ひた挿花ほど嫌味のものはありません、恰も僞善家か又は巧言令色の人のやうなもので、斯ういふ花は何程巧みに挿けてあるやうでも見穢めがして來ます、前圖は秋海棠の一種挿です、只折取つたのみの枝を、曲げもせず矯

（正一花譜の内）

秋棠陰石

めもしないで、そのまゝに挿したので、誰かの詩に秋棠は石に陰し云々といふ句がありましたが、石はないが傍に捨石でもありさうな秋の庭の淋し味は表はれて居る積りです、次のはダリアの……これも一種挿で、矢張り少しも巧みを弄んでない所がこの瓶花の見所であります、……露重げに大輪の花二つが、丁度眠りから醒めぬ唐美人の嬌艶を見るやうにうなだれて、何の作意も工風もなく、小供でも挿したやうな狀に挿けたのではありますが、ダリアといふ花の情味は表はれて居る積です、牡丹だの大輪の薔薇なども猶且この式に挿ければ能くその趣味を現はすことは出來やうと思ひま

小供のさしたやうな狀

（正一花譜の内）

す。

投入花の姿と形

投入花にも姿狀あり

風體は千變萬化。 稍々もすると投入れ瓶花には姿がないといふ人がありますが、それは大なる間違ひであります、投入花だとて決して姿のないといふことはありませぬ、苟りにも草木の枝を瓶口に挿して瓶花を組み立てる以上は、姿狀のない筈はありませぬ、倒れて懸崖體の瓶花を爲し、立ちて森林體の瓶花となり、叢り生ひて前栽體の瓶花となるのですから、姿のない所ではありませぬ、實にその姿狀は千態萬樣で、例の流儀花のそれに比べると何れ程姿形に富んで居るか知れませぬ、卽ち樹振に依り枝の姿に依つて——その草木の姿狀に從つていろ〳〵に挿すのですから、假令同種類のものを挿しても決して一樣の姿に組み立てることは出來ませぬ、又組み立つべきものでもありませぬ、だから流儀花のやうにその

流儀花よりも風姿に富む

姿や形が單調でなく、隨つて趣味も風體も極めて豐富であります、畢竟これは流儀花で教へるやうに、花の姿を一定の型に入れるやうな窮屈なことを爲ないで、草や木がその姿のまゝに自由の天地に逍遙する爲であります、でその挿し上げた瓶花は百瓶が百瓶、姿狀を別にするといふ面白味が表はれて來るのです。

自由の天地に逍遙す

鑄型に入れぬ瓶花。 流儀花の方では花の姿に規則を設けて、眞、添、止だの、天、地、人だのといふ組立てるべき瓶花の枝に局部的の名目を附けて、その局部を寄せ集めて一瓶の花を組み立てるのですから、如何しても瓶花に一定の形が出來るのです、卽ち眞だの添だのといふ小面倒な掟を以て瓶花の姿を或る鑄型の內に入れやうと努める、だから百瓶が百瓶總て同じやうな姿の瓶花となるのです、假令一二の例外はあるとしても、先づ大體に於て挿花の形は定つたものと爲つて了ひます、故に無理に枝を矯めたり、葉を剪つたりして、草木を不自然な、殆んど不具同然の姿にする、これ

流儀花は姿を一定の鑄型に入れる

日野資朝も顔を背ける流儀花

大自然の情味を賞玩す

は惡口ぢやない私達の眼から見ると實際一種の不具者であります、彼の資朝朝臣が東寺の門で雨宿りをした時に、手や足の屈つたり首の歪んだ乞食の群を見て、自分が平生愛玩して居る盆栽も矢張り彼等と同樣だと覺つて、その盆栽を打ち捨てたといふから、今日の流儀花も、若し資朝朝臣が見たならば、恐らくは顔を背けて通ることだらうと思はれます。

然るに我投入瓶花の方では前に述べたやうに、強て瓶花の姿を鑄型に入れるといふことを爲ないで、只もう草木の自然――彼等の心まゝに挿して、その大自然の情味を玩賞するといふのが根本義でありますから、少しの嫌味も矯情もなく眞の自然的で、而て悠然天地と融合するといふ妙味が溢れて居るのです、卽ち流儀花が不自然な規則で縛られて居る窮屈さうな狀と異つて、花も人も共に我あることを忘れて居るかと思ふ程に極めて無邪氣でそして可憐な瓶花となるのです、で、これに對する者はもう世の中に罪も汚れもあることを知らないで、恰も天國にでも生れたか

二個の百合花

と思ふやうな心持がするのです。

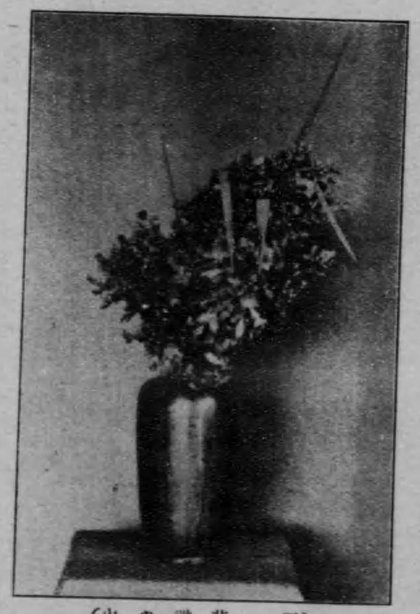
流儀花の方では柳は斯ういふ風に挿けよ、櫻は斯ういふ枝の用ひ方にせよ、などといつて祕傳だの口傳だのといふことがあつて、もう枝の使ひ方、葉の配り方までチヤンと規則が極つて居ます、だから櫻は櫻、梅は梅で百瓶挿けても千瓶挿けても殆んど花の型も姿も定つて了つて居ますが、投入の方では前にいふやうに、花の姿が千變萬化ですから、例へば今百合を挿すとしても、その姿はめいめいに異つて居るのです、然しその百合花の特色と情味は、何れも〳〵充分に具備つ

（正一花譜の内）

形を定むれば

て居るのですから、此の圖のやうに、姿は如何う異つても、その百合花といふ風情は少しも缺けて居ない、これがこの投入花の妙趣であります。

それから次に出してあるのも然うです、双方ともに夏菊と尾花ですが姿は全然異つて居ます、決して眞だの添だの根〆などといふ役枝を定めて花の姿を束縛するとか、それを或る一定の鑄型に入れるといふことは致しません、又實際然樣なことの出來るものではないのです。



（正一花譜の内）

若しそれを行れば、瓶花はもう死物に爲つて了つて、何の風情も面白味

瓶花は死物となる

もない、恰で造花を見るやうなものに爲るのです。

瓶花の姿の變化すること。……瓶花の姿が一瓶毎にその姿狀を異にして居ることは、獨り前の瓶花に限る譯ではありません、幾瓶あつても一々其姿狀を別にするので、それは同じえぞ菊と薄でも上圖と前のとを比べて見ればこれを知ることが出來るのです。

（正一花譜の内）

草木の特色を失ふ可らず

梅は梅らしく

梅にしても櫻にしても、山吹、海棠、百合、芍藥、卯の花、凡て花といふ花、草といふ草、如何なる花でも草でもです、その草木はそれ〴〵に特殊の情趣を備へて居るものであります

すから、其花の風情を花瓶に移さうとするには、如何しても梅はうめらしく、松は松らしいといふ挿方にするといふことが肝要なのです、牡丹に似た芍薬や、櫻のやうな梅が出來ては、全然瓶花の趣味といふものは亡失なつて了ふ。

一抱あれど柳はやなぎかな、如何程その幹は太く逞しくして枝にも樹にも蒼苔蒸しわたりて、星霜年ふりたる狀は見えても、柳は尙且柳であつて、何所となく優し味を持つて居るものです、で、挿花はその挿し上げた所に是非この呼吸が見えて居なくては面白くも何ともないものとなるのです。

柳は柳の優し味あり

それは獨り柳のみではありませぬ、前にいふやうに、松でも櫻でも、女郎花、撫子、更に些さやかな路傍の無名草にでも、必ずそのめい〳〵の特色と情趣を具へて居る、この消息を巧く捕へさへすれば、如何んなものを挿しても、趣味は實に津々たるものであります、これ丈けが花道の技術なので、

外には法則も口傳もありませぬ、これ以上に樣々の法式を立つるのは全く蛇足であります、況して其法則が自然と逆行する無理な規則や、又趣味を破壞して殺風景を奬勵すると同じ手段である以上は、全然法則などを打ち捨て天然と融合する挿花を挿す工風をしなければなりませぬ。

自然と逆行する規則を破壞せよ

これは花道ばかりではありませぬ、總ての藝術……殊に美術は然うで、例之ば畫を描くにしても詩歌俳句の句作にしても同じことで、作意や細工の痕が見えるやうでは到底その作品に人を魅するといふ力はありませぬ、乃ちそのものゝ情趣を……良くても惡くても、その自然の狀が寫されて居なくては無効であります、

人を魅する力なし

それを誤ると芍藥だか薔薇だか解らぬ牡丹が出來たり、梅だか櫻だか見分けのつかぬ海棠が出來上るのです。

例之ば詩歌にしてもその通りで、撫子の如うな優い草花を歌ふにゴツ〳〵とした小むづかしい措辭を用ひて、松か梅でも詠じたかと思はるゝ

やうになつては、到底もその情味を現はすなどといふことは思ひもつかぬことであります、卽ち撫子に相應はしい調、梅や松を詠ずるには又それに似付かはしき調子が必要なのであつて、これが所謂らしいといふ意味なのであります。

らしくと云ふ事は流儀花の方でも主張す

このらしくといふことは昔の挿花者流……例の流儀花の方でも隨分八ヶ間敷く云つて居る、云つては居るが、然しその挿し上げた花が少しもらしくないのは誠に殘念であつて且つ不思議であります、

あれ程出生といふことを八ヶ間敷く云ふのに如何いふものであらうか、これは恐くは作意を用ふるのと、そして花型を掟てゝ花を一定の鑄形に入れやうとするといふのが、その大なる原因ではあるまいかと思ひます、卽ち花木の自然といふことを破壞してかゝるからのことであるかと思はれます、卽ちらしくないものを作り上げるからのことです。

自然を傷けざるを要す

らしいと云ふことを求めるには、如何してもその草や木の自然を傷けないやうに、生のままに挿けるといふことが大切であります、風情は既う草木が自らに持つて居る、それに更にその上に作意を加へたり趣向を添へやうとするから醜怪なものが出來上るのです、屋上屋を作る位ならば尙可なりであるが、らしくない結果が醜怪なものとなつては全然美だの趣味だのといふ高い氣分は微塵もなくなるのです。

人工主義の規則は草木の虐待なり

不自然で、そして人工主義の形式から立てられた花型や法則を以ては、到底櫻らしい櫻も梅らしい梅も挿けることは出來ませぬ、極端な云ひ分かは知らぬが、流儀花の方の法則は大抵花卉草木の虐待でなければ一種の趣味の破壞といふに過ぎぬやうに思はれます。

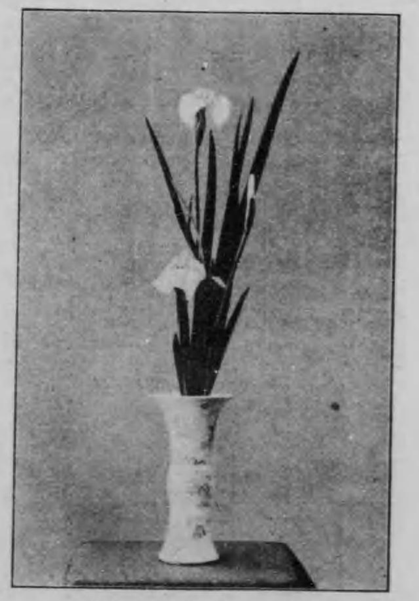
男らしい花菖蒲

次に掲げてあるのは菖蒲、芙蓉の二瓶ですが、その菖蒲の方は……姿は瓶花としての形の巧拙は兎に角何處までも菖蒲であります、決して杜若ともあやめとも見えない積りです、スラリとして丈の延びた、そしてその男らしい所がこの花の持前です、俳聖芭蕉翁が、五尺の菖蒲に水を注けた

といふことを申しましたが、それはその潔い、スッカリとした姿を申すので、この瓶花もその特色は決して忘失して居ないのです、所謂らしいと云ふ點は充分に備へて居ます。

それから次圖の芙蓉です、これも涼露淳々としてその紅白の葩に金剛石の如うな光を添へて、秋のものの寂かな花園に異彩を放つ芙蓉の狀は、その無作意な挿し方をした所に、充分その特色を發揮して、矢張り芙蓉らしい狀のある瓶花だといふことを確信して居るのです。

涼露淳々たる芙蓉二輪



（正一花譜の内）

更に今一つそのらしいといふ狀を次の二瓶に依つて會得して欲いのです、即ち一瓶は、えぞ菊で、一瓶は、藤の花です、

双方ともにらしく挿けた積です、即ちえぞ菊は、名は菊と呼んでも、其葉の形から花の何所かに夷臭を帶びて、秋の菊と比べては勿論のこと、野菊などのやうな些やかな花に比べても其花の色までが、……一名を紺菊といはれる丈に、紺紫色の濃厚い色や、薄赤色をした所は何となく下品て居ます、だがその下品た所に彼花の特殊の風情があるので、この花を挿けて秋の菊の隱逸な風情に陷つたり、野菊の閑

夷臭を帶べるえぞ菊

（正一花譜の内）

寂な姿を模したりしては、一向えぞ菊といふ甲斐がないのです、矢張えぞ菊らしい所のあるといふことが肝要であるのです。

それから藤の花ですが、假令、花の姿は流儀花風に挿しても、投入風に挿けても、藤は藤だと云つて、もしこれを俗氣紛々たる何々流といふ型に嵌つた窮窟な姿に作つたならば假令、その花は瞿麥でもなく、山吹でもなく、藤花には相違なくとも、風情が藤でないから何の詮もない瓶花です、私共のらしいと云ふのは、その挿ける花其物を云ふのでなく、挿上げた瓶花としての姿に藤らしい所があるや否やといふのが問題なのです、左圖は松に藤を掛けたので、松にかゝりて咲ける藤波、などと詠んだ狀を見せた積りです、單獨に藤ばかりを挿したよりは、それに一枝の松を配しますと、ズットその狀が引立つて、そして藤の眞面目がよく活現はれて來るものです、然し何れ程松の枝が大きくとも觀賞の中心は矢張藤の花にあるのです。

（正一花譜の内）

松一枝を添へてその情味を引立たしむ

（正一花譜の内）

不易の眞、變化の相

不易といふこと

自然の風情を發揮せしむ

草木の情趣。 瓶花でも盆花でもです、その草なり木なりが天然自然に具へて居る風情趣味といふことを失はぬといふこと、一歩進んで申しますと、その草木が天然に持つて居る風情を發揮させるといふことが、瓶花なり盆花なりを觀賞する上に於ての第一義であつて、これが花道の眼目なのであります、もうこの眼目が失かつた日には、花を挿けて賞觀するといふ主意は全く失くなつて了ひます、

（正一花譜の内）

花道の眞

これは所謂梅は梅らしく柳は柳らしくといふのであつて、挿し方は如何樣に變つても……即ち千瓶が千瓶、百瓶が百瓶異るのが當然であります、

一見してその草木の情趣の現はるるを要す

すが、この情趣即ち、らしい、といふ事のみは、花道に於ての不易の眞理であるから決して動くものではないのです、一言に申しますと、これが花道の眞であるのです、前圖は秋海棠と薄の交挿ですが、その何となく挿した所に所謂花の眞は現はれて居る積りです、

菊を挿けても櫻を挿けてもです、その姿は假令如何變化しても、その挿し上げた所に何處となく、アヽ梅だな、櫻だな、といふ所が、これを一目してその花の風情が眼に映るといふことが肝腎であります、ナニ如何な挿し方をしても櫻は櫻、梅は梅で、盲目でない限りは誰にでも直ぐ解かる、それを不易の眞だの風情だのと、然う小難づかしくいふ必要はないといふ人があるかも知れぬ、然し存外世間で行つて居る挿花には、櫻らしくない櫻の挿花や、柳でありながら柳らしくない柳の瓶花が澤山あるやうに見受ます、流儀花といふものゝ挿方は、殆んどこれであるやうに思はれます、畢竟これは花道の眞といふことを知らぬからのことであつて、即ち彼の流

眞の有無は瓶花の姿に非常の相違あり

一は自然一は不自然

儀花のらしくないのを見ても、如何に不易の眞即ち花のまことといふことの大切であるかが知られるではありませんか。

この花道の眞のあるのとないのとが如何なに瓶花の風情の上に相違を表はすかといふことは、流儀花が不自然で、さうして梅を挿けても又桃を挿けてもです、殆んど千篇一律で、少しも梅や桃の情味が現はれて居ないのに、却つて小供が反圃の側や土堤に生えて居る無名草を摘み取つて、何となく籠にでも盛つたものに、いふにも云へぬ野趣が溢れて居るものがあります、これは抑も何に因るのですか。

それは一方は自然、一方は不自然、一は眞、一は僞であるからであります、何もそれは花の……挿し上げた瓶花なり盆花なりの形や姿に依ることではありませぬ、要はその風情でありますから、その瓶花が不易の眞を失つて居らぬ所に、この妙諦が籠つて居ることを知らねばなりませぬ。

こゝに挿けてあるのは、浦島草……一向見立はない草であります、それを薄と挿し交ぜたのですが、流儀花のやうに形や姿には少しも拘泥しないで、只もう無作意に挿したのです、が、其所に何となく晩夏初秋の氣趣が現はれて居る積りです、斯う挿けてこそ始めて花の情味も見え、又その野趣津々たる所に、花を觀賞する所の目的も達せられて居るといはなければなりませぬ。

浦島草と薄の交挿

神武の昔も大正の今日も櫻は櫻なり

（正一花譜の内）

千古に新なり。 木や草が天然自然に保つて居る風情といふものは、古今を一貫するもので、即ち神武の昔から大正の今日まで少しも變化はないのです、昔の櫻は彼んな風情であつたが、今の櫻は斯ういふ樣子に咲くとか、今日の女郎花は黄い花で、枝がなよ〳〵と垂れて居るが、古代の女郎花は

全然趣が異つて居た、などゝいふことは決してありませぬ、櫻は昔も今も、朝日に匂ふ山櫻花といふ壯美優麗な趣味がその天然の風情で、又女郎花は何時見ても依然として、なまめき立てる女郎花といふ歌の情趣を保つて居るものです、

千古不易の風趣

これは自然であつて、所謂その草木の出生なるもので、千古不易の眞といふのはこれを申すのです、乃ち花卉草木は之を花瓶に挿すにしても又は盆や籠に盛るにしても、この不易の眞がチヤンと備つて居なければ例のらしい花を挿したり盛つたりすることは出來るものではありませぬ。

花型に泥む可からず。 今いふ不易の眞といふは時代にもよらず又場合に依らないで、今も昔も依然として同じ狀の風情でありますから、何時挿けても海棠には海棠らしい狀がなくてはならず、藤には藤らしい趣のあることが必要で……何所かにその情趣がほの見えるといふことが大事なのであります。

らしい姿が必要なり

即ちその瓶花の姿の如何に拘らず、らしい所のあるといふことが何よりも大切であつて、花の挿け方、即ち形に依つて梅が櫻に見えたり桃が梅のやうな風になつてはその情態が失せて了ひ、隨つてその瓶花の生命といふものはないと申しても可いのですだから、挿花の形や相は如何あらうとも、一見してそれが梅だとか櫻だとか、又萩であるとか女郎花であるとかといふことが……即ちその花の情趣が現はれなくては不可ないのであります、で形は挿け方に依つて種々に變化しませうが、その草木の風情丈は何處までも不易であるのです、これが瓶花としての相と、その草木の趣味とが時として別々の道を行

瓶花の相と風情と伴ふものに非ず

（正一花譜の内）

くことがあつて、梅は斯ういふ形に挿すものであるとか、海棠は恁ういふ姿に挿けなくては不可ぬ、といふ法則などを立てることの出來ない次第でありまする、況してその法則……挿方の規則といふものも、流儀花で主張する所は極めて杓子定規式の不自然なものである上は、絶對に然る規則などには泥まないで、却てこれを避けるやうに爲た方が宜いのです。

相を別にし趣味を同じくす

前に示しました二つの瓶花は、花は兩方とも撫子と薄とキリン草の交ぜ挿でありますが、挿し上げた姿は全然變つて居ります、……決して同じ花型とは申されぬが、その草花の眞趣を少しも矯めないで、彼等の天眞を全うせしめてある狀は双

（正一花譜の内）

方とも少しも異つて居ないのです、即ち双方ともに撫子は撫子らしく、薄やキリン草は如何見ても薄なりキリン草なりの情味を失つては居ないのです、これが即ち花の姿の如何に拘らず、その不易の眞を全うして居る所であつて、一抱へあれど柳は柳かな、木ぶりや枝ざしは如何あらうとも、柳には柳の面目が何所かに現はれて居るといふことが必要です、即ち柳の幹の太いのはその外相であつて、柳はやなぎかなといふ所にその情趣のあることに着眼するのが花道に於ては大切なる事柄だと心得ねば不可ません。

樹容は千態萬狀

姿に變化あること

千態萬容。 均しく櫻であつても柳であつても、その姿といふものは決して一樣のものではありませぬ、枝毎に其形が變つて居る、これは挿花や盛花の上の姿ばかりではないのです、野や山に生えて居る草木でも然う

松のいろ〳〵

で、例へば一口に松と申しても懸崖に臨んで危げに見えるよろ〳〵松のをかしげなる姿のもあれば、又谿間などの大石の上に、何時かの昔に仙人でも種を蒔いたか知らと云ひたい狀の、痩せた姿の松……寒流石上一株の松といつた風のもあります、その外海邊に立て居る磯馴松の潮風に靡いたのや、雲を捲いて起つた龍かとも見える廣野の古松の雄偉なのや、數へて見れば、同じ松でもその姿は實に千態萬容であつて、決して松だからと云つて、何の樹も何の樹も斯ういふ木振り枝振りと定つて居るものではありませぬ。

外相の變化は自然なり

この木毎に相の變るのは獨り松ばかりではない、梅でも櫻でも又籬の下の菫や土堤の蒲公英のやうな、さゝやかな草でも尙且然うであります、天然の草木が既に然うであつて見れば、その草なり木なりを折り取つて挿す瓶花や盛花の姿に一々變化のあるは當然であつて、而て又その變化のある所に趣味が表はれるのであります、それを挿花の姿には一定の形があるものだと云つて、梅は斯う、櫻は斯う、藤、山吹、牡丹など、あらゆる四季の草花にその姿を掟るといふことは、何といふ愚かなことでせう、これは獨り愚といふのみでなく、實に一種の滑稽であるといつて差支ないのです。

一種の不具者なり

斯んな窮屈な、そして不自然な規則の拘束のもとに挿された瓶花に如何して趣味などがありませう、丁度不健全な家庭か、兩親のない不幸な境遇に育つた子供のやうなもので、生々した狀や活氣などは微塵もなくて、精神も體質も殆んど不具同然のものに爲つて了つて居ます、そんな瓶花が如何して心を慰めたり精神を養つたり致しませう、美といふ感念は露ほども無い、寧ろ不快な厭な感じが起ります、我々は流儀花の置いてある座敷に入つた時に一種の嫌な感じを起します、これはこの不具的挿花の不快な形が眼に映るからである、これは少し極端な云ひやうのやうではありますが、恐くは少しでも美といふ趣味を有つて居る者は何人も同感

草木の生立に任せよ

だらうと思ひます。

だから如何しても、挿花はその姿が自由自在であつて、草木の生立ちのまゝに任せて些の羈縛をも加へないやうにして、その天眞を樂ましめるといふ心で挿さすことが肝要です、隨つて瓶花の姿は千態萬容で決して一律にならないのが當然なのです、

新しみは自然に依て生ず

新しき姿。 挿花の態容に一定の姿狀のないものであるとは前に申した通りですが、實はこの變化の爲に、挿花に新しみを生じて來るので……その面白味は全く茲所にあることを知らねばなりませぬ、然し又その變化といふのは決して殊更に奇を求めるといふのではないのです、只何でも變つたことをしたり珍らしい挿け方をすればそれが變化だと思ふのは大變な誤りです、要之に奇も正も自然に出たのでなくては不可ませぬ、求めて爲たのは厭味であります、求めて奇を作るやうな行り口は流儀花と少しも異りませぬ、これを我が花道の上からは邪路に入つたと申すのです。

奇も正も自然なれ

同じ木でもそれ〳〵趣を異にす

で、唯もう自然のまゝに、痩せた草はよろ〳〵と挿し、太く逞しき木は雄偉とした趣に挿して、その木や草が特に有つて居る持前の風情を傷つけないやうに挿す、……其所に變化の妙といふものが現はれて來るのです。

（正一花譜の内）

同じく瓶に挿す花でありながら、その花卉草木の種類に依つて、いろいろ趣に變化があり、又同じ種類の草花の内でも、其枝ぶりに依つてそれ〳〵に變化があるもので、一々其相を別樣にするのが面白味です、實際又何うしても斯うなくて

はなりませぬ、茲に於て面白味と新し味とが現はれるので、若しそれを强ひて變化をさせまいとする時は、折角の挿花は極めて無趣味な嫌味なものに爲つて了ふのです、それを何時も何時も花の姿は半月形でなくては不可ぬの、天地人とか五行だとかの役枝を具備て居なければ不可ぬといつて、枝を矯めたり葉を透したりして、一種の鑄形に容れるといふことは、花卉草木の生氣を殺ぎ活氣を奪ひ、甚だしきはその美の生命を亡失はして了ふといふ結果に終ります、例の流儀花の方で行る挿法といふのは大抵これであります、だから流儀花には生氣

（正一花譜の内）

變化ある爲に風情が浮動す

もなく活氣もない、況して新し味などは微塵もありませぬ、要するに挿花の相に變化のあるのは自然を行くので、これで以て始めて挿花の玄妙な風情といふものが浮動して來るのです。

（正一花譜の内）

上圖は山百合と花橘と晝顔の交ぜ挿です、木ものゝ上に草があり、草の下に蔓ものがある、流儀花の方の人の目から見たらば、法式が見られぬとか、出生に背いて居るとか、花の形が半月形でないとかいつて非難するかも知れませぬ、けれども、その少しも格法にも規則にも縛られないで、變化自在に挿けた所が所謂變化のある相とい

ふもので、又挿花に新し味のある所なのであります。

然しこれも只徒らに奇を弄するといふのではありませぬ、自然に任せた變態であつて、決して人工的の技巧を行つたのでもなく、又殊更に無茶苦茶に挿したのではありませぬ、又前圖の紫苑でもその前に掲げた、松と菊と柘榴の實の交挿でも然うです、一々枝の使ひ方、花の姿の整へ方に變化を見せて居ります。

花留のいろいろ

投入花の挿し方

定規を設けず

流儀花の方では如何なる些かな花を挿けるにも花留といふものを使ひます、それは木槿や柳の小枝のY字形のを花瓶に嵌して、そして花の根を堅く止めるのです、それを池の坊などでは股張と稱へて居ます、又この股張を使はなければ、竹の割つたので井の字形の花留を作つて、それで花

を止めます、一番簡易なのでも一の字形の割竹を嵌めるか、又は丁字形若くは十字形に割竹を嵌めて、それで花を留める、流儀に依つては、階段形に作られた金屬製の花留を使つたり又その外いろ〳〵の形をした花を挿すに便利な器械を使ふのもあります。

投入花には花留の規定なし

が、我が投入花は別にこれと云つて定つた留方を致しませぬ、花留は使つても使はなくても構はぬ、又何の流派の花留を應用しても構ひませぬ、全然で花留を用ひないで挿す場合には、花の自然の据りを見てそれを花瓶の縁に凭せて、その自然に留る所で留るのです、と云つてその折つた枝や草花がその葉裏を見せたり無理な枝ぶりに爲るのは絶對にこれを避けまする、即ちその枝の自然の姿の自然に留る所で留るといふのですから、別に花留などを用ふる必要はないのです、唯々自然の姿の佳い所を何となく無作意に瓶口に挿し入れて花を留めるといふ所が、投入挿花の眞面目なので、これが投入れ花といふ名稱の起つた位でありますから、ナニ

投入花の眞面目

も強て花留を用ふるには及びませぬが絶對にそれを禁じるといふのではないから、其時の都合次第で、これを使つても使はなくても臨機應變の處置を致して構ひませぬ。

花木の風情次第

意匠次第

花の留め方には前に云ふ如うに規則を立てませぬ要はその草なり木なりの風情次第で如何やうにも面白く挿すといふことが肝要なのであつて、又それは我意匠次第ですから、茲に松

（正一花譜の内）

松老いて緑濃に、梅痩せて清く白し

を使つて彼所に梅を挿し交ぜる、それでその挿し上げた趣味は、松老いて緑濃に、梅痩せて清く白しと云つた、氣品の高い瓶花を挿けるといふ調子にするのです、

乃ち、松の葉は蒼翠を深く罩めて、その間に白玉を括つた如うな梅の枝を縱横自在に自然のまゝに挿すといつたやうな工合に致しますので、要花の留方は如何でも可い、唯だその挿した花卉草木の趣味と姿狀に風情を作るといふことを第一と致すのです。

枝の使ひ方に規則なし

繪を描くが如し

投入花は屢々いふやうに、花の形にも姿にも一定の規則を立てませぬ、隨つて眞に如何な枝を用はなくては不可らぬの、根〆には斯ういふ草でなくてはならぬといふ極りは無論ありませぬ、唯あるに任せて心のまゝに、調和の好い枝を面白く組合せて挿せば可いのであります、即ちその挿

紙面に筆を下すが如し

し方は恰も畫家が紙面に筆を下すやうに、茲所へ枝を一つ、彼所へ花を一輪といふ風に思ふまゝに挿して、そして一瓶の姿を整へるのです、加之もその整へるといふのも、彼の流儀花式の或る定つた場所に定つた枝や花を用ふるやうなのではなくて、その枝や花の配置は全く此方の意匠次第で如何う挿しても構ひませぬ。

前裁式の趣味

枝が縱横に差し交はしたるが面白いと思へば甲の枝と乙の枝と相交錯せしめ、そしてその間に花を點ずるといふことをしたり、或は又交ぜ挿にして薄もあれば木芙蓉もあり、それに葛の花や浦島草などを、丁度前

（正一花譜の内）

無意味に挿しては風情なし

裁に秋の草花が咲き亂れて風に靡いて居るやうな風にでも挿さうと思ふならば、此に圖に出した瓶花のやうに花や葉を相交錯させて、眞に無作意に、掴みざしにしたのかと見えるやうに花瓶に入れるのであります。

然ればと云つて全く無意味に挿しては面白味のあるものではありませぬ、一寸見た所では何の工風も考もなく只無雜と挿したかの如うでは あるが、その無作意の如うな何處かに一種いふに云へぬ風情のあるといふことが必要です、矢張りそれは、此方の意匠で以て然ういふやうに挿すのであります、無作意といふのは殊更に構へて奇を弄したり、流儀花の如うに枝を矯めたり葉を透したりして一種の花形に嵌め込むといふことを避けて、天然自然の木や花の情趣を失はぬやうにその風情を整へるといふ意味なのです、言葉を換へて云へば、形を整へるといふのではなくて風情を整へるといふのが當つて居るのです。

投入花は一寸見ると全く無意味の掴み挿しのやうに見えますが、然し

決して何でも構はないで、只無闇に挿し込んだのではありませぬ、畫家が畫を描くのでも然うで、例へば花鳥の圖を作るにしても、只いろいろの花をコテ〳〵と描き並べて、それへ蝶や鳥を添へるといふのではありませぬ、その位置を見計つて、葉や花を巧く案配する、それには先づ以て考案を立てゝ何所に花を着けたらば可いであるか、彼所に葉を着けたらば好いか、といふ全體の畫面を心の中に想像して

枝に依て使ひ方を考へよ

そして構圖する、挿花の方もその通りで、先づ其挿すべき枝に依つて如何挿したらば、……挿すといへば一向世話のないことのやうだが、一本の枝

（正一花譜の内）

でも、一輪の花でもです、何の邊にそれを使ひ、如何なる場所へ配つたらばその花の風情が表はれるだらうといふことを考へて、その枝ぶり木ぶりを見立てゝ巧くその草木の持前の趣味を現はすといふことを工風して挿すのですからその間の苦心は決して容易なものではありませぬ、即ち畫家の構圖をして紙面に筆を下すと少しも異りがないのです、前の瓶花は宗全籠に卯の花の投げ挿しです、一寸見ては一向無雜作のやうではありますが、葉一つにも花一枝にも隨分苦心をしたのです、未熟の我等の瓶花ですから時鳥が寄り來て鳴きさうな、といふ程に入神の作とは云へませぬが然し、その挿した所……葉や花が參差と重り合つて居るあたりから、組目の疎らな麁末な籠の隱見するその調和は、自分丈は何處となく春夏の交の山里の垣根を想到するに足る作といひたいので、彼の士芳の、卯の花の葉は持ちながら笹の垣、といふ句などをこの挿花の賛にして欲しく思ふのです。

春夏の交の山里を偲ぶ挿方

花に去嫌ひなし

古風の挿花者の理窟

何の流派の挿花でもですが、古風の流儀花の方では去り嫌ひといふことを喧しく申します、それは此花と彼花とは挿し合しては不可ぬとか、彼の木とこの草とは一つに挿けぬものだといふやうなことで、例へば陸の草と水草とを一つには挿けぬ、草物には木の花を根〆に使つては不可ないなどゝいふのですが、それにも一つの理窟はあるので、前に申した陸草と水草とを一つに挿さぬといふのは……例へは河骨とせんのうや蜀葵の如うなものとは同じ場所に生るものでない、それを一つに挿るといふことは出生に背く、といふのです、聞いて見れば一理なきにあらずですが、

餘りに窮屈な言分なり

然しそれは餘りに理窟に捉はれた窮屈な考へだと思ひます、成る程蜀葵やせんのうは水中には生えるものでない、又河骨が陸上に生えるものでないことは勿論でありますけれどもそれを挿す器は花瓶であつてモウ

花瓶は池や畑に非ず

畑や汀や池ではありませぬ、水中に咲いた花や陸上の花を切り取つて、それを花瓶といふ器物の中に入れる……挿けるのであつて見れば、花と花との趣味風情さへ面白く調和すれば、山のものと海のものとを一つに挿した所で、少しも不都合はないのであらうと思ひます。

花瓶は何所までも花瓶であつて、それを草木の出生地……木や草の生えて居る汀や谷間や畑と見立てると云ふのは極めて俗意です、若しそれを一つの地面とか汀とか見るといふことに成りますれば、花瓶は一種の箱庭のやうなものに成つて、挿け上げた花は全く俗化して了ひ

ます、花瓶はいふまでもなく花を挿す器でありますから、前にいふやうに如何なる花を一つに交ぜて挿しても風情さへ整へば決して不可はありませぬ、何れかといふと却つて種々のものが交つて程能く趣味の調和を得るといふことが面白いのであらうと思はれます、だから投入花の方では決してこの去り嫌ひといふことを云ひませぬ、如何なるものを交挿にしてもかまひませぬ、ですから春の草ならば、春蘭のやうな谷間に生えるものと、田の傍に咲いて居る蒲公英や嫁菜とも生け合せますし又、アネモネだのチューリップなどの如うな洋種の……加之も温室も

趣味の調和を得れば可なり

アネモネと芥出楓

のを芽出しの楓に配ふことも致します、これが又却々好い風情なのであります。（挿圖參照）

理窟詰の去嫌をなさず

趣味を一致せしむること

投入れの方では流儀花の如うな理窟詰の去り嫌ひは致しませぬが、然し、その挿し合せる花と花との趣味の一致……言葉を換へて申しますと趣味が調和するといふことに注意を拂ふことを忘れてはなりませぬ、即ち不調和の花を取り合せるといふことはこれを避けたいのです、秋の花で申しますと、菊とコスモスだとか、木芙蓉と黄蜀葵の交ぜ挿しなどがそれであつて、これらは如何しても趣味が一致しないから、之を一つに挿し合せても調和が良くないのです、同じことでも菊と紅葉だとか、木芙蓉と水引草だとかを挿し合せたのは非常に風情が整つて見えます、即ち如何なものを挿けても構はぬとはいふものゝ、不調和な花と花との挿し合せ

剪裁は流儀花の如く甚しからず

ずるといふやうに、規則を設けて喧しくいふのではありません。

（正一花譜の内）

枝を矯めず葉を透さず

絶對にではありませぬが、挿花には枝を矯めたり葉を透したりすることは成るべくこれを止したいと思ふのです、勿論甚だしく重疊した葉や

は成るべく避けなければなりませぬ、所謂呉越同舟は行つて見た所で面白味がないから挿けたとても何の詮もありませぬ、然しそれもです、流儀花でいふ如うに規則として許さぬとか法に背くといふて禁

矯曲するといふも眞に低なり

無用の花や枝があれば、それを切り取ることをせぬのではないが、例の流儀花のやうに、やれ此枝は彼の枝を見切るから切り取るとか、彼の葉は此の葉と重複するから鋏を入れねばならぬ、といふ極端な剪截や矯曲は一切行りませぬ、丁度畫を描くと同じでありますから、無暗に葉が重つたりもつれた如うな風に枝の入り亂れるのは……假令へ規則や法式には、その定めがなくとも、見た所で面白味がありませぬから然ういふ場合には切り取ることもしますし、又少しの矯曲は致します、然しそれは挿花全體の姿の上から成る丈風情のあるやうに爲したいといふ爲に行るのであつて、規則や法式の爲に切つたり矯めたりするのではないのです、だからもう枝を切るとか葉を透すとかいつた所で、それは極めて僅かに……眞に餘義ない場合にのみするので、流儀花が最初から矯めたり透したりしてかゝるのとは決して同日の論ではありませぬ、又場合に依つてはその重なり合つた葉の、コンモリとした樣や、枝が縱横に入り組んだ所ろに云

曲折も縦横も一種の風情なり

奥のある挿法を用ふべし

ふに云はれぬ情趣が罩つて、却て面白く見てることもあります、何れかといふと草物でも木ものでもです、枝や葉の重つたり見切るのを恐れて只スラ〳〵と、唐葦や柳の枝のやうに挿したのは面白味のないものです、如何しても挿花には多少の曲折があり交錯した所があつて……葉や枝の高低參差として入り亂れた所に趣があるものです、それは挿花ばかりではない、繪などを見ても然うで、アヽ好い出來だといつて賞讃される花鳥の圖などには決して流儀花で見るやうなスラ〳〵としたものはない、必ず枝が交錯したり又葉が重なり合つて、此の枝の彼方や、この葉の奥は如何うなつて居るのか知らと、一種の

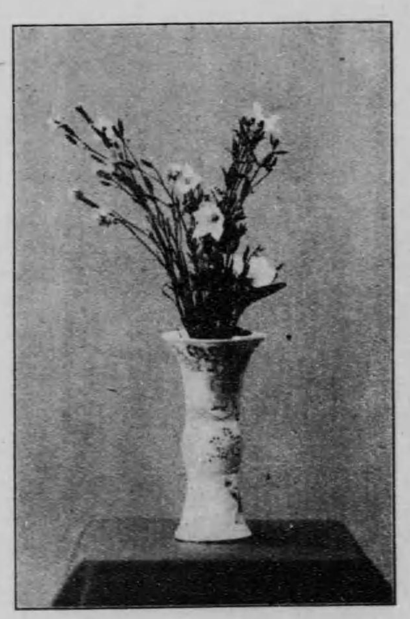
（正一花譜の内）

花形は定め難し

想像を起さしめる……所謂奥のある描法が用ひてあります。

挿花も亦是斯うなくては面白くありませぬ、斯ういふ風に面白味や風情を造るには、例の規則的に枝を矯めたり葉を透すといふことをしては、到底も面白い挿花を作ることは出來ないといふことを知らねばなりませぬ。

定まれる花形なし



投入れ花にはこれと云つて定つた形はないのです、又斯ういふ形に、といつて定めることは出來ますまい、そして又一面から云ふと、形の定らぬ所に面白味もあるのであらうと思

野趣縱横

ひます。

或るものはスラ〳〵として曲のない……如何にも端正な形のもの：：例へば菖蒲や桃などの如うなものもあり、又或るものはよろよろとして力無げに、僅に立杖に倚りてその姿を保つて居るといふ……一寸懸崖式の如うな形のものもあります、例之ば野菊だの殘菊だの、松……例の倒れかゝつたやうな形の懸崖の松などがそれです、又枝が縱横に交錯して長短參差として野趣の横溢して居る狀のものもあり、これは梅や野薔薇などの花を見る風情です。

（正）

（内）

花の種類に依つて斯ういふ風にいろ〳〵と形の變化がある計りでなく、同じ種類の花でもその枝に依つては又樣々に形が變ります、その形の異つた樣に挿すといふのが投入挿花の特色なので、いつも〳〵天地人や眞副留の役枝で以てその形や姿を定めて、同じ型に入れやうとして苦心するといふことは誠に笑ふべきことです、そして又然うして出來上つた挿花は到底無趣味殺風景な厭らしい姿となることを免れないのです。

花の姿は如何うでも可い

で、一口にいふと投入花は形に定りがないのであつて、いはゞ如何でも可いのです、然しその如何でも可いといふのが實は頗る難い所で、投入花の工風の存する所は此の一點なのであります。

花の据り枝葉の振り

前にいふやうに投入花の形は變化自在であつて、決して一定した姿はないとはいふものゝ……如何のやうに挿けても可いのではありますが、然し、その挿ける所の花の趣、葉、枝の据りといふことには充分に注意しな

横枝は横に、立枝は立てゝ用ふ

ければなりませぬ、即ち裏枝を使つたり、横に出た枝を眞直に立てゝ挿したりすることや、葉裏を上に向けたり、上を向いて咲く花を下に向けたりする……所謂葉や花の据りの惡いのは絶對に禁忌致します、葉は葉表を出し、枝は自然の据り……横枝は横に使ひ、立ち枝は立てゝ使つて、花は又その輪がチャンと上を向いて咲いて居るやうに据りの可いといふことが肝腎なのです、勿論花に依つては俯いて咲くものもあります、例之ば鶴首といふ或る種類の百合花や釣鐘草などがそれであります、又澤山の花の付いて居るものには横を向いて居る花や、時には俯いて咲いて居るものもあつて、悉く上を向いて居るもの計りが花の据りではないで、然ういふものは、その俯むいて居たり、横を向いて居る所が、その花の据りなのですから、斯ういふ花を挿けるには、その天然の姿を据りと見て可いのです。

俯ける花の据り

兎に角天然自然のまゝ地から生えて咲いてる如うな狀に挿す……自然のまゝの振りを失はぬやうにするといふことが尤も大事な事柄なのであつて、この花、葉、枝の据りさへ自然に適つて居れば、挿すべき挿花の形や姿は其時々の隨意で可いのです、即ち枝の工合、木の狀に依つて千變萬化するのであります。

其時々の宜きに從へ

（正）花譜（内）

で心の中で花の形を巧んで枝や葉を曲げたり切つたりして、不自然の花形に花を嵌め込まうとするやうなことをしてはなりませぬ、もう挿花の形は花に任せるといふことに爲ればそれで充分なのです。

花の取り合せ

投入花は花を殺さないで姿をかしく挿すといふことが大切であり又

花の自然美といふものは露程もありませぬ、即ち花の自然は全く滅殺されて、只もう心とか添とかいふ形を造る爲に花の美しみは零に爲つて了つて居ます、加之もその整へたといふ形が、何の花も何の花も、心は眞直に突つ立つて一番長く、添はそれに次いで一定の位置を占め、そして留といふのがチョンボリと前の所に出て居る、マア斯ういふのが所謂整へられた形ですが、千瓶が、千瓶少しも形に變化が無い、變化のないのも可いとしその眼目なのです、だから流儀花のやうに姿を整ふる即ち花を殺して形を作るといふことを爲ないです、流儀花は盛に矯曲を行りますから挿し上げた所を見ると

（正一花譜の内）

二眼とは見られぬ嫌味な瓶花

て、花の姿に少しも面白味も風情もないのです。

斯ういふ行り方の挿花ならば何も譯のないので、只もう法則通りの位置に法則通りの枝を挿すまでであるから、實に何でも無い、思ふやうな枝がなければ自然に背いても何でも構はずに無理に曲げたり伸ばしたりして形を造るのですから、……然しそれは、恐くは花の美を賞玩する道ではあるまい、のみならず花の美といふものは全然これを失つて了ひます、隨つて花の生々とした所や、天然に花木が持つて居る趣味といふものは微塵もなくなつて、姿も形も全然で嫌味なものに爲つて、少し心のあるものゝ眼には二眼と見ることが厭はしい感じが致します、それは畢竟花を虐げるのと、花の形……挿花の姿が不自然になる爲に、美といふ痕跡がなくなるからのことであるのです。

投入花は然うではない、花の美はし味を少しも損じないで、そして挿し上げた姿に趣味を保たせるのですが、これには花の取合せといふことが

廣い葉に細かい花

尤も大切なのであります。

と云つて此花と此花とは挿し交ぜて不可らぬとか、彼の花には此の花を添へねば法則に背くといふやうな窮屈な掟は設けませぬ、範圍は頗る寛濶であつて、何を挿し合せても少しも構ひませぬ、然し然うなると却つて選擇が困難になつて來る、廣い葉に細な花、細い葉には大い花、雄偉としたものには纖細なもの、又花の色でも然うで、派手やかなものには澁味のあるものか寂の趣味があるものを持つて行くとか……勿論紅黄紫白さま〳〵の美いものゝみを取合せて一種の美觀を表はすのも面白いから、一概には申されぬが、要は只一體の風情が一種の趣味……寂た花には寂の趣味、豐艶な花には豐艶な趣味を表はすやうにするのが肝要です、これにはその寂味なり美はし味なりを一層利かせる爲に、寂味あるものには豐艶なるものを添へ、豐艶なものには、それに一寸澁味のあるものを配つて、美はし味なり寂味なりを利かせるのです。

（正一花譜の内）

木芙蓉と糸すゝきの配合

例之ば秋のもので木芙蓉のやうな美いものには糸すゝきのやうな輕いものを配ひ、春の花であれば櫻と松を挿げ合せるとか、又夏の花では山百合に芽出しの苅萱のやうなものを取合せるの類であつて、これが矢張花を挿すに就ての一廉の考案なのです、この取合の善いと惡いとに依つて挿花の姿の上にも非常な醜美の違ひが生じて來ることを知らねばなりませぬ。

花の高さ

花は高きよりは低きがよし

昔の花……流儀花の方では挿花の高さを花瓶の一倍半と云ふのを定法としてあります、勿論これは大體をいつたのであるが、兎に角花の高さは花瓶よりは餘程大いのが普通です、然し投入れの方……必ず投入れと限つた譯ではありませぬが、挿花は花瓶……花瓶の高さよりは低く且つ小い方が調子が好いやうに思ふのです。

無論これは花の種類にも（正）より又花瓶の姿にも依る一ことですから一概には申花譜されませぬが、押並らしての云ふと割合に小い方が風（内）情があるのです。

例之ば杜若など……これを籠花器に挿すにしても、花器の一倍半……花器に依つては然ういふ風に挿しても惡くもなからうが、然し花も葉も莖短かにザングリと挿したのは何となく輕軟な感じがあつて、如何にも南風に薫る杜若といふ美しく軟な花の趣味が充分に表はれて見えるやうに思はれます。

莖短かに挿したるが面白し

尤も水盤などに伸んびりと挿けたのは、汀の春を偲ばせて、面白味がないでもありませぬが、既に挿花といふ以上は、文字の通り、挿し花であつて、水陸の草や花を摘み取つて、花瓶に挿してそして其花を……花の風情を愛觀するといふのが主旨目的ですから、杜若を挿して八ッ橋を思はせたり、櫻を挿けて嵐山を目の前に見せるといふことは全く考が違つて居るだらうと思ひます、若し挿花といふものが然ういふものだとすれば、挿花は一種の箱庭です、作り物です、然う爲つては挿花は極めて俗ッポイものとなつて了ふのみならず第一花を觀賞するといふ目的をも失ひます、これでは畢竟り花は箱庭を造る一種の材料といふに過ぎなくなつて、俗物の眼を喜ばすることは出來るかも知れぬが、氣高い……花の崇高な情趣

挿花は箱庭に非ず

を味ふといふことは到底出來ないのです。

今日世間に行はれて居る流儀花には往々この跡が見える、流儀花の俗惡な原因は、一つはこの箱庭主義が加味されて居る爲でもあらうと思ひます、挿花は決して箱庭趣味では不可ません、何處までも花そのものを賞玩するといふのでなくてはなりませぬ、即ち百合花でも牡丹でも、又薔薇でもです、其一枝を取つてタップリと水をして小花瓶にでも挿した美しさは、恰も浴後の美人といつた趣があつて、その風情は實に千金の價があります、マア斯かる瓶花に對つた時の心持といふものは何とも云へぬ美しい感じがします、世間の塵心も罪汚れも全く消えて了ひます、花の美：：挿花の美は實に茲所にあるのです、これを箱庭式の……花を箱庭の材料に便ふやうな考へで以て挿した花と比べて見ると、その趣味の雅俗は到底同日に語ることは出來ませぬ、

挿花は箱庭式では不可なり

浴後の美人の如し

さあ斯うなると如何しても花は莖短かに挿して、花瓶の口にスクンだやうな樣に挿すといふことが肝腎です、木ものでも然うであるが、草物は分けてこの感じが切である、やうに思ひます、けれどもこれは從來の挿花が、その長さを花瓶の一倍半と規則を定めて居るに就て、必ずしもそれに拘泥するものでないといふ爲に申すので、莖短にと云つたからとて、一概にそれに泥んでは不可けませぬ、要は花と花瓶との調和にも依り又花と花との釣合にも依ることであるといふことを忘れては成りませぬ。

草物は取り分け莖短なるがよし

一種挿

一種挿といふのは、梅なり椿なり、其他何にても花卉草木の一種のみを挿すのであつて、この一種挿をするのは、花が一種しか無い時、又は珍花、名花などを挿す場合――これはその花を深く賞玩するの心から他の花を交ぜないで、單にその花一種を挿すのです、それから又高貴の人等より賜つた花なども是非これを一種挿にしたいのです、これはその花を珍重す

名花珍花を尊重するの心

る意のみならず、一つは賜つた人に敬意を表するの意味も含まれ居るのです。

（正一花譜の内）

二種挿にしようと三種挿にしようと少しも構はぬ、面白く風情のあるやうに挿すが可いではないかなどゝいふのは亂暴な議論で、然ういふ無趣味な殺風景な云ひ分はテンデ話に爲りませぬ、畢竟單獨にこれを挿すといふのは、その花を鍾愛して特別に扱ふといふやうな意味なので、挿花といふものゝ姿の上からは別に何の影響もないのみならず時としてはそれに糸すゝきの二葉か三葉も添へたらば、と思ふやうな場合も無いではありませぬが、然

糸薄の一葉を添へたく思ふ

しそれは姿の上又風情の上から云ふ希望です、珍花や名花や恩賜の花などを單獨に挿して特別扱ひをするといふのは、花の姿や形狀を賞美する以外に、一種の奥床し味のある、情味の籠つた風流な行爲であるのです。

それから又一種挿は、今いふ珍花、名花、恩賜の花、遠來の花に對する心しらひの外に、如何うしても他の花と交ぜて挿しては面白くないといふやうな場合に行ります、然ういふ草や花は是非これを一種挿に致しますのです、即ち牡丹だとか菖蒲だとかいふ類のものです、玉堂富貴といふこともあつて、牡丹や海棠や木蘭などを一つに集せることもありますが、然しあれは繪畫の方で花の麗はしいものを一つ所に描き集めたといふことが面白いので、彼の歳寒三友などと同樣に、同じ趣味を有つて居る花を一つに寄せたのです、恰も小野小町と業平朝臣を結び付けるのと同じ行り口なのであります、然し實際に挿花として牡丹と海棠と木蘭とを一つに挿し交ぜたとして、その趣味が面白いとは申されぬ、寧ろ牡丹は牡丹、海棠

交ぜては挿されぬ花

小町と業平を結び付けた行り口

口取式の挿花

は海棠で、これを別々に挿した所の風情には劣つて見えます、何でも甘味いものであれば可いと云つて、それを一つに盛り合せて、それで御馳走に爲ると思ふのは誤りです、それは却て美味を減殺するといふ結果に爲ることもあります、恁ういふ行り口を口取式の挿花といふ、キントンと羊羹と卵子燒、何れも美味いものには違ひないのですが、然ういふ取合せは拙な献立と云はねばならぬ、鰻の蒲燒に山椒を添へたり、照り燒に生姜を添へると云つた行り口に爲た方が、双方ともにその味が遙に引つ立つて來ると同じで、花を挿すにも矢張この呼吸を忘れては不可ませぬ。

櫻でも連翹でも

だから牡丹のやうな美しい花は、如何うしてもこれを單獨に挿したい、これは獨り牡丹のみではない、他の花でもその種類に依つては是非一種挿にしなければ不可ぬものが幾許もある、櫻にしても、連翹のやうなものでも、場合に依つては……多くの場合には交挿よりも寧ろ一種挿の方に風情があるものだといふことを知らねばなりませぬ。

一種挿の風情は高雅なり

四季の一種挿

一種挿の風情

一概には云はれぬが、押並して一種挿はその風情が閑雅……時として は閑寂に傾きます、だから床の裝飾に依つては、若し崇高とか幽寂といつた風の挿花を要求する場合には、如何うしても一種挿にするが可い、勿論これは花の種類にも依ることですが、四疊半か何かの小座敷に、大德寺ものゝ一行幅か、消息などを仕立てた幅でも掛けた時、若しその季節が首夏であれば、佗しい籠に卯の花の一種挿か、青磁の花瓶に燕子花などの一種挿を行れば最も調

（正一花譜の内）

（正一花譜の内）

伦びた裝飾に紅紫絢爛の瓶花の不調和

は實に無限の情趣があつて床の調和は極めて宜いです。

若し今いふ如うな幅を掛けた小座敷に、紅紫絢爛の交ぜ挿を行つたとすれば如何うでせう、全然裝飾を打ち壞すことに爲りまする。

然し一種挿の花だからと云つて必ずしも寂し味のあるものゝみとは限りませぬ、時には花は一種でも駘蕩の春光を瓶頭に偲ばしめる艶妖の情致のある瓶花もあります、例之ば器は銅器にしても磁器にしても、又籠和が可い、又春季だとすれば椿か水仙の一種挿、晩秋初冬の頃ならば殘菊か寒牡丹を少しも他の花を添へないで、花瓶は銅器でも籠でも可い、これを單獨に挿した狀

古銅瓶に山吹一枝

でも構はぬ、例之ば櫻花の一種挿し……枝にも樹にも少しも剪截の痕跡を留めない、……モウ手折つた儘の枝といふ風情に挿したのや、又山吹の一種挿……古銅の方形式か何かの花瓶にザングリと挿して高卓の上に据ふるか、或は煤けた魚籃形の籠にでも挿けて床の胴釘に掛けたのや、又木蘭などを思ひ切つて澤山に銅瓶にでも投げ入れた……枝が縱横自在に彼方此方にさし交はして、それに雪白の光澤のある花を着けた狀などがそれであります。

畢竟沈着いた幽趣な風情なのも、派手やかな浮立たやうな風情なのも、それは一にその花の種類と挿し方に依るのであつて、單種挿だから寂味があり、交ぜ挿だから華やかな瓶花になるといふとは少しもありませぬ。

交ぜ挿

その趣味は多く豐麗なり

交ぜ挿は概して妖艶の風情あり

甲乙丙丁さま〳〵の花を取り交ぜて二種以上挿し合せるのを交ぜ挿と申します、一種挿の花は何となく高崇閑雅な風情の方に優れて見え、交ぜ挿のは何處となく妖艶豐麗の情趣に富んで見えるのが普通でありますが、これも矢張り花の種類にも依り又一つはその挿し方にも依るのでありますから、絶對に交ぜ挿は豐麗の花だと云ふことの出來ぬは勿論です。

（正一花譜の内）

一種挿よりも孤寂なる交挿

交ぜ挿は概して派手であるとは云ふものゝ、時としては一種挿の或る種類よりも一層寂し味が現はれて見える場合もある、例

閑寂の極致

へば刈萱に龍膽、それに地楡ぐらゐを煙けた籠花入に交ぜて挿したのなどはその趣味が閑寂で、枯枝に鵯のとまりけり秋のくれ、以上の寂し味のある瓶花です、又一種挿でも牡丹や櫻のやうなものは勿論、藤花、甘草、躑躅の如き春の花を始め、秋のものでも萩、木芙蓉、秋海棠などは却々に華麗で、大抵の交ぜ挿よりも艶やかな風情がありまする、だから寂派手の分れ目は必ずしも挿ける

（正一花譜の内）

花種の多寡にのみ依るものでないと云ふことが知られませう。

高低參差は挿法の祕事

野邊に八千代草の咲ける風情

交挿が殊に優れて面白く見ゆるのは、その花や葉が或は高く或は低く、又その枝が縱横に入り亂れて、如何にも野邊に八千草などの咲き亂れたるかのやうに、高低參差として相交錯したる所の風情にあるのです、これは木ものでも草ものでも、又木もの草ものゝ交ぜ挿の時でも同じであります、只草ものゝみを挿し交ぜた時と、木ものゝみの交ぜ挿と、木草の交挿の時とで多少その趣味が違ふ計りであります、然し趣味は違つても花や葉に高低を作り、又枝葉が入り交つた風情を表はすといふ點は何れも變りはありませぬ。

甲乙丙丁相倚り相扶く

草花の交挿

全體の風情は丈を低く……所々に延びたものを配ふといふことも必要ではありますが――甲の花と乙の葉、乙の葉と丙の花とが無作意に相倚り相扶け合つたやうな狀に、天然の叢を見るやうな姿に交錯させて、甲乙丙丁の野花が、おのがじゝその天趣を樂むと云つたやうに挿し交ぜるのが必要であります、同じ交ぜ挿といふ内にも、大體から云つて木ものと木ものゝ交挿、木ものと草花との交挿、草と草との交挿に依つて夫れぞれ趣味を變へねば面白くないのでありますが、同じ草花の交ぜ挿をするにも、若し仔細にそれを區別をしたならば、春の草の交ぜ挿と、秋の草の交ぜ挿とは……即ち一口に交ぜ挿といつても四季に依つてその趣を變化させなければ、決して自然の狀を寫すことは出來ないのであります。

（正一花譜の内）

季節に依る變化を現はすべし

（正一花譜の内）

これは畢竟氣候に依つて、咲く花の種類も樣子も違ひ、從つてその情趣に變化がありますからで、如何してもその自然の有樣を寫さうとするには、如上の事柄に深き注意を拂ふといふ必要があるのです。

春の草花の交挿

さゝやかな初春の草花

さゝやかな草ではあるが初春のものでは先づ第一に福壽草、雪割草：花はまだ見せぬが御形、喜蘭草、水仙なども、菜籠形……の花器にでも、その

群芳妍を爭ふの狀

二三種を取り交ぜて挿したのは其樣子が如何にも淸々しく、正月といふ氣配が十分に見えて面白いのです。それから又稍春更けてからは、菜の花、土筆、すゝ菜、紫雲英、春蘭なども風情があります、ズット春が闌になつてからは、水柏、阿彌陀草、熊谷草、兎葵、胡蝶花などといふ種々の草花が出て參ります、これ等の花は如何にも美いです、形容詞にも群芳妍を競ふだの、百花繚爛だのとさへいふ程であるから、これを花器に挿すにしても何となく春風の駘蕩に醉ひさうな趣がありたい、そして蝶などのその挿花の邊に飛びさうな風情を見せるのが必要であります。

葉よりも花を多く用ふ

春の草花は一體に丈を低く、そして比較的に花を多く、タップリと挿したいのです、花の取合せも、黃だの、紅だの、紫だのゝいろいろの花を取り交ぜて――何れかといへば葉の割合に花を多く使つて、見るから柔軟な、そして暖かい感じのある挿花に挿け上げるといふことが春の草花を挿す大精神なのです。

たんぽゝも菜種も霞む春の土手

などは春の投入花……草物の投入花の消息の幾分を語つて居るやうに思ひます。

夏の草ものゝ交挿

草花とりくゝに美し

（正一花譜の内）

晩春の草花は初春のそれと異つて、却々に美し味のあるものでありますす、然し夏の草花はそれよりも更に一層其美し味を加へて來るもので、草花の美は實に此一季に鍾るといつても可い位です。芍藥、百合花、瞿粟、撫子花など、何れも何れもその麗しさを美人に譬へたりさまざまの麗い言葉を以て形容されて居るのでも解りませう。

日本趣味の草花と洋挿の草花の美

夏の草花の交挿

先づ日本に固有……在來の草花では、芍藥、百合を始め蘭蓀、紫羅傘、玫瑰花、鐵線花、朝顔、諸鼓子花、花葱、岡河骨などの美い花がありますす、それに近來舶來のダリヤ、シネラリア、ロベリア、カンナ、などゝいふ妖艶華麗のものが幾許もあつて、いづれもその花の色から葉

（二一花譜の内）

夏の草花を挿すには一段の生氣あるを要す

の工合まで、とりどりに夏季の趣味を表はして居ますから、この季節の草花を挿すには如何しても蓮花草や、蒲公英が土手に咲いて居るやうな春の草花の投入れとは挿方に於ても大に工風を要するのです。

（正一花譜の内）

夏の草花を挿すには美しいといふ中にも、何處となくみづみづしい處があつて、加之も春の草物に比べてはズット活氣と生氣とに充ちて、一寸見た所でもキビキビしたといふ狀のあるのが肝要です、若し春の草物の挿方を溫乎りとした乙女に譬へたならば、夏の草花は東京で云へば下町の娘さんと云つた調子に挿せば、よくこの

春の挿花は散在的に挿し夏のは交錯して挿すべし

季節の草物の趣味を表はすことが出來るです、此心持でさへ行れば、挿花は拙くともこの季節の草花の趣味を傷つけるやうなことはありませぬ、總體夏季の挿花は……薔薇深くピアノ聞ゆる薄月夜　子規。

（正一花譜の内）

といつた趣味を瓶頭に漾はせたいのです、一樣には申されないですが、春のものは花がポチポチと彼方此方に部分的に咲いて居るやうに挿すのが好く、夏のは彼此相交錯して、長く短く極めて不規則に挿すといふことが肝要です、決してリボン式や毛氈式の花壇などを見るやうに規則立つて、行儀よく區劃して挿しては面白くあり

ませぬ。

秋の草花の交挿

初秋と中秋と晩秋とに依つてその挿やうに心しらひが無くては不可りませぬ、これは獨り秋にのみ限る譯では無論ありませぬ、春でも夏でも冬でも同樣であります、が、取り分け春と秋とは花の種類も澤山あつてその季候につれて樣々に趣が變つて咲くのですから、如何しても、初、中、晩といふ風に、その季節の推移に隨つて挿方に

氣候の推移に隨て工風を要す

（正一花譜の内）

工風がなければ、その花の趣味を表はすことが出來ないのです、

それでは初秋の花は如何挿けたらば可いか、又中秋、晩秋の花は如何挿けるかといふに、勿論定まつた法式や挿方がある譯ではありませぬ、若しそれを強て極めれば矢張り流儀花の亞流で、挿花は死物と爲つて了ふ、要之り初秋は初秋の花らしく、中秋の花は中秋の花らしい……その花と季候に伴ふ趣味を表はしたいのです、然しそれが容易のやうで却々難い所で、挿花の技倆の見えるのは全く茲所にあるのです。

が、それが又一面から云ふと技倆だの何だのといつて技巧を弄したり、又法式……法式といふ程でなくとも、幾分か型に捕はれる爲に挿花が拙劣になつて、厭なものに成り易いのです、畢竟格法だの技巧などといふのは、行れば行る丈自然に遠かつて行くのですから、成程と云つて人に見惚れさせるやうな自然的の瓶花を挿すには、如何しても全然格法や技巧を心から取り捨てるといふことが必要であります。

心から格法を擺脫するを要す

で、今いふやうに格法と技巧を全然り忘れて了つて、趣味といふ方面でその花の氣配を表はすといふことにするのです、だからそれを形などに就て形容して說明しやうといふことは實際困難です、それを挿方を極めていふといふことは更に難い、マア一寸和歌に歌はれた狀で云つて見ますると、「いろいろの花のかぎりを移し植てあれぬ庭をも野にぞなしぬる、」

景樹翁の歌意

……これは景樹翁が庭栽野花といふ題で詠んだのですが、初秋の草花を投入式に挿すには、この歌の心持で行れば可いのです、女郎花もあり、糸薄もあり、又撫子もあり、その外萩、桔梗、藤袴なんど實にいろいろの花がこの季には咲き出でます、それを陶器でも銅器でも可い、花と能く調和する花器に、極めて無作意に……丁度秋の花野を見るやうに、高低長短參差とした姿に入れるのです。

秋の花野を髣髴せしむ

そして一體の風情は、なよなよとして靡いたやうな狀に、所謂しどろに亂れた如うな風に挿し合せるのです、だから春の草花を挿すやうに、茲に

一株彼方に一株――丁度蒲公英や菫が土手の芝生に生えて居るやうな狀に挿すのとは全然趣を變へて、此花と彼の花、彼の草とこの花とが彼方此方と叢生した狀に、優しい趣味に挿すのが秋の草花の挿方であります。

漢宮秋老いて芙蓉冷かなり

八月の末から九月の中旬へかけては、漢宮秋老芙蓉冷と歌はれる所の中秋の候でありまして、流石に秋日和の、日中は爍くが如き殘暑ではあるが、然し此季節は朝露は眼に冷かに夕風肌に寒さを覺ゆるといふ爽凉の候であつて、或る花は艶にして秋に奢れる色を見せ、或る花は葉末稍色づき初むるといふ頃ですから、插花にも矢張この趣味を見せるといふことが必要です、木芙蓉のあでやかなるに、葉末の黄ばんだ鈴子草だとか、水引草などのやうな寂しい草や、薄の三葉か五葉を配つて挿すのです、それも或る草はウンと丈を長くし、又或る花は莖短に挿すといふやうに、不規則……一寸見た所では不調子のやうな狀に挿けます、一體の樣子は先づ、撫子や尾花が袖に咲き殘る

花を莖短に葉を丈高く挿す

家足

などゝ云つた調子が中秋前後の草花を交ぜ挿にする風情であります、

晩秋の草花の挿方

晩秋初冬の情味

「紅もかくてはさびし烏瓜」といふ蓼太の俳句は誠に晩秋の野邊を、殊に野草の佗しい狀を言ひ表はして居ます、晩秋の草花を挿けるには如何してもこの心持でなくては面白くありませぬ、晩秋とは申しますが兎に角晩秋初冬と續けて呼ぶ位でありますから、秋といふ内にも何所となく初冬の情味が加味されて居なくては面白くありませぬ。

露に打たれたる草花の風情

秋風落莫として徐ろに襟の冷かなるを覺ゆるとか、風露漸く繁くして花卉悉く地に委するなどゝいふ冷く寂しい言葉を以て形容される季節でありますから、四圍の景物は何となく一體に引き締つて來ます、そして叢に咲き殘り咲き出づる草花が、露に打たれ風に吹かれて居るのですから、何となく花にも葉にも一種凄愴の氣を帶んで居ます、だから此季節の花を瓶に移してその寂寥の趣味を賞玩せうといふには――勿論花そのものも既に斯かる風情を表はして居るのではありますが、その挿し方がそれに相應はなくては晩秋の草花の情味を沒却して了ひます。

一草は高く一花は低く

一草は高く一花は低く、加之もその葉末はうら枯れて、さらさらと音がするかと見える根元に、些い萎けた花ものを、一つ二つ添へるといふ所に云ひ知らぬ味ひが現はれるのです、例之ば籠花器に二株か三株の芒を挿して、その根〴〵に郭公子――ほとゝぎすと云ひます、花の形が桔梗の葩のやうで柿紅色の、如何にも晩秋の野花の代表花といひたい花……それを莖短に二株ほどと龍膽の二三本も添へて挿けた狀は實に好いです、芒も郭公子も澁い淋し味のあるものであるのに、その根元に紺玉のやうな可憐な龍膽を配つた所は、色の配合に於ても趣味の調和に於ても、晩秋の情味を表はしたもので恐らくは此の上を越ゆるものはなからうと思ひます、景文や養川院の會心の作にはよく恁んなやうな意匠の畫を見ること

晩秋の情味の極致

があります、兎に角如何んなものを挿すにしても、晩秋の草花の挿方の祕訣は茲にあることを忘れてはなりませぬ。

冬の草花の交挿

葉隠れに些かな花を着けたる初冬の趣味

やはり初中、晩の三季に依つて多小の取捨のあるべき事は勿論ですが、然し此季節は概して天地蕭條風物收藏の時季でありますから、草と云はず木と云はず、寒氣の爲に萎縮して僅に葉隠れにさゝやかな花を着けて居るといふに止まります、又その内に自ら生氣があり力のある花を葉間に見せて居る所が冬季の花の特色で、同じく蕭條だとか、落莫だとか云つても、晩秋のそれとは自ら異る所のあるのは茲所であります、だからこの意味に於て挿さなければ冬季の草花を挿す詮がありませぬ、例之ば水仙が寒氣にめげずして黄蕋白花を濃翠の葉間に見せたるのや、金貨のやうに麗しい花を薄紅に染めた葉の間に括つて咲く寒菊の花に咲力のある

芭蕉の一句冬季の挿花を説明す

所などは、實に冬季の草花の特色であります、然しその花に力があり霜に奢つて居るといふ内にも、春の花や夏の草花が絢爛だの妖艶だのといふのとは全然樣子が異つて居ることはモウ花を見ても解ります、だからこれを花瓶に挿すにしても、是非茲處の差別がなくては不可りません、金屏の松の古びや冬籠、モウ多く語るを要しませぬ、冬季の草花の挿方は此の外には何物もありませぬ。

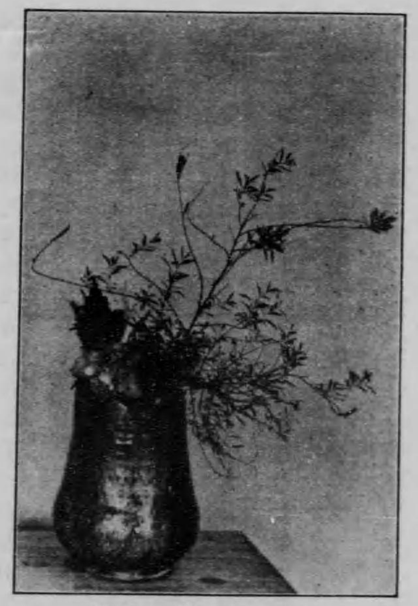
後宮三千の美妃を見るの觀

草と木の交挿

剛柔の調和。 木ものと草ものとの交ぜ挿は單に草もの計りの挿交ぜと違つて剛柔の調和を充分に程能く取合せたいものです、若し草物のみの交挿に後宮三千の美妃を見る美趣や、幼兒が打ち集ひて幼稚園に嬉戯するのを見るやうな可憐なる樣子があるとすれば、草ものと木ものの交ぜ挿には男女打ち集りて遊舞する舞踏會場を見るの美觀に似たりと云

ひたいのです。

草木の種類に依つて一概には申されませぬが、男性的の木ものに優美妖艶な女性的なる草花を配つて挿しますれば、双方ともに一段その美を加へ來るものです、若しその調和が巧く行けば、木ものの草ものを別々に挿したるよりは遙かにその美觀を添へて來ることは勿論です。



（正一花譜の内）

老松と撫子の配合

龍髯虬鬚長へに古蒼の色を罩めたる老松に、美麗にして殊勝らしく幽韻に富んで居る撫子を添へたる、或は鐵幹横斜の枝上に白玉の花を着けた狀が、高士を見るやうな野梅に翠袖黃冠唐美人などに譬へたい水仙花を配ひたるなどは、その剛柔の兩性が相調和したる所に云ひ難き面白味がありまする、だから草木の……

剛柔兩性の調和

總てをとは申されぬが、草木の交挿の多くの場合には、木ものゝ剛壯にして男性的なるに、草ものゝ優艶可憐なる女性的のものを配つて、双方の特色を充分に發揮させたいのです。

拘泥すべからざる理窟

木と草との長短。 流儀花の方では木ものと草ものと挿け合せる場合には、木ものを草ものよりは丈高く挿け、草ものはズット丈を短くして：：僅の配ひに過ぎぬといふ規則を立てゝ居ます、これはモウ何流でも同じでありますが、然しさういふ規則は決して拘泥すべき事ではありませぬ、畢竟それは理窟から割り出した定規で、木は草より丈が高いといふのが出生……本來の性質だといふ理窟に捕はれた考へから來て居るのです、如何にも木は草よりは丈の高いのは普通ではありますが、然う理窟詰に爲つては風韻も趣味も亡失くなつて了ひます、畫家が花鳥の圖でも描

く場合には、草は稈小く、樹木は高く描出いてその狀を表はすといふこともありませうが、それは何も無い紙なり絹なりの面に、草や木の狀を描き現はすのですから、長いものは長く、短いものは短かく描いてその風情を作らなければなりますまい、けれども挿花の方はモウ花そのものが……草にせよ木にせよ、既にその持前の性情を充分に表はして居ますから、木だから高く草だから低く、といふ理窟に拘泥する必要は少しもありませぬ、場合に依つては高いものを低く、短いものを長く挿ても少しも差支はないのです、差支のない計りでなく、然ういふ風の行口が非常に瓶花としての面白味を添へることもあるもので、例へば常夏を思ひ切つて高く……細長い花器に挿して、その根〆の所に夏椿一二輪を極めて短く、殆んど花計りを挿したかと思ふ程に莖短かに挿すといふやうな挿け方……これが又却々に好い風情であります、

（正一花譜の内）

草木は既にその特色を發揮し居れり

去年の春のことでしたと覺えて居ます、川合玉堂畫伯がその新邸の客間の琵琶床に、古備前の形の締まつた鼓形の花瓶に、雪柳を極く無作意に挿して、その根〆……とでも、見られる位置に、普通挿花者流の方で根〆と云へば最前の所に挿すのであるのを、その雪柳の後部……雪柳を透けて見えるやうな位置に紅椿を二輪、加之も一輪は苔、一輪は半開きのを、極めて短かく殆んどその花瓣が瓶口に接く程に配つて挿されたことがありましたが、その趣味の高尚で、風情の優れて居たのは今でも一種の印象が殘つて居ます、遺に大家であります、木ものは高く草ものは低く、などゝいふ理窟を全く離れて行られたのは實に敬服です、これは氏の美的思想—

玉堂畫伯の挿花

創作の手腕が畫面計りでなく、瓶花の上にも表はれたのであつて、氏の手腕の上から云へば別に褒める程の事ではないのでせうが然し、能くも思ひ切つて行つたものだと思ふのです、大抵の人は椿を高く且つその分量を多く挿して、雪柳を聊か計り配ふといふのが普通の行り方であるのに、それを轉倒して今いふやうに挿した手際が如何にも嬉しいのです、恁ういふことは兎ても俗流の挿花先生などの夢想も及ばぬ所なのです、それにその色の取合せ――純白の雪柳の僅かに嫩綠の新葉を見せたるさへ既う一種高潔な感じがあるのに、それへ紅

（正一花譜の内）

非凡の手腕

色も形もよく調和せり

畫を描くよりも苦心あり

芽出しの械に紅花一輪

色の椿、茶褐色の花器といふのですから、色の調和に於て少しの申分がないのに、纖細糸の如き雪柳の枝と圓形の椿の花、形の調和も亦頗る好いのであるから、一倍も二倍も瓶花の美趣が引き立つて來るのです、花を挿すには、形の上からも色の上からも、種々の方面に調和と釣合とを得て始めてその美を爲すもので、畫家が紙面に對つて構圖を試むると少しも異りはないのです、或はそれ以上の苦心を要する場合もあるやうに思ひます。

萬綠叢中の一點紅。 松だとか、樅だとか、金松だとか云ふ常磐木や、又落葉樹にしても欅の芽出し械樹の芽出し衞茅の芽出し……普通はこれらはその紅葉時に於て觀賞するものを、芽出し時に用ひて、それに何か美しい花物を配ふのですが、一點紅と云つても必ずしも花一輪でなくとも宜い、二輪でも三輪でも、それを或綠の葉の間に使ひますので、これは丁度その綠の葉物が一種の背景のやうに爲つて、一段瓶花の美を加へて參ります、例之ば芽出械に小田卷草を添へるとか、松に富貴草を配ふとかするの

で、無論斯ういふ種類のものは如何程立派な樹でも、葉物のみを挿しては少しも面白くありませぬが、それへ今いふやうに紅一點を添ふるときは非常に瓶花に生氣を添へて、双方の美が相倚つてそれを各別に見るより以上の美はしさを加へるのです、但しさういふ場合には紅一分綠九分位の割合に行きたい、多くとも二、八の比例でなくては面白くありませぬ、モウ紅三分以上と爲つては一點紅式の花の趣味は零に成つて了ひます。

瓶花に生氣を添へ來る

紅綠參差。松に櫻花、芽出の欅に薔薇花、總て何に限らず淺綠嫩綠のもの

のに、淡紅か深紅の花ものを交へて、紅綠參差たる狀に挿すのも却々に風情がありまする、綠の色濃かな木ものに色の美はしい花ものを……木でも草でも可い、交ぜて挿したのも風情があります、例之ば木の花、櫻、梅、桃、その他何にても美しい花に、葉のみの草を添へたのも惡くはありませぬ、昔風の流儀花では全然行らぬことですが、例之ば紅梅に春蘭を配つたり、桃に白菜か葉牡丹などを交ぜて、文人畫の合作にあるやうな狀に挿けたのも惡くはありませぬ、紅梅に齒朶、若楓に鬼百合などは取分け趣味があるやうに思はれます、花型は無論極まりなどありませぬ、高低參差として縱横に枝がさし交はして、加之も天然の樹林でも見るやうに、樹や草が自由自在に己がじゝ所得がほにその位地を得た狀に挿すのが眼目であつて、又投入花の面白い所なのです。

紅梅に春蘭、桃と葉牡丹

松と凌霄花の交ぜ挿

下圖は松と凌霄花の交挿であります、濃翠の松の葉の間から思ひ切つて低く、殆んど床板に花が着くかと見える程に、黃赤色の……夏の氣配を

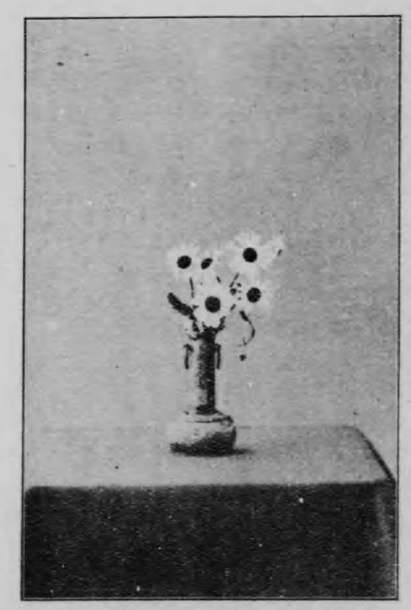
作者の苦心せる松の枝

充分に表はした一輪を垂下れさせた所は、色の配合も花の姿も、普通の挿花師の人々が思ひも付かない狀に挿したのです、殊に花籠の手を横ぎつて松の枯枝を一本、殆んど無意味のやうにさし出したのは、作者の方では多少の苦心の存する所だといふことを見て貰ひたいのです、斯ういふ場合に用ふる松は、行儀よく葉先の揃つたものよりは、葉も枝も靡いたやうな野松などの方が却てよく調和するやうに思ひます。

一輪挿

四輪五輪亦可なり

一輪には限らぬ。 名は一輪挿と呼んでも必ずしも一輪に限りませぬ、二輪三輪……時には四輪も五輪も挿すことがあります、然しこれは花の……輪の大きさにも依り又花の種類にも依ることでありますから、一概に云ふことは出來ぬのです。



（正一花譜の内）

薔薇、玫瑰等を挿す場合なり

何程四輪でも五輪でも構はぬと云つたからとても、百合や牡丹の如ぐなものを四輪も五輪も挿しては、それはモウ一輪挿の風情ではないのです、四五輪も挿けて好いのは、薔薇だとか、玫瑰花だとか、撫子の如うなものを挿す場合なのです、それでも何れかと云へば、花は多いよりは少い

方が趣味が高いやうに思はれます、勿忘草だの素馨といつた如うな、一枝に澤山の花の著いものは無論花の輪の數で云ふことは出來ませぬ、枝の姿花の狀……それを全體の風情に依つて觀賞するといふことが必要であります。

牡丹、百合などは一輪に限る

非常に大きい花

輪が並外れて大いもの、例之ば日廻草、牡丹、百合花といつた如うなものは如何しても眞の一輪に限ります、一輪でなくては不可らぬといふ規則のある譯ではありませぬが、斯んな花を二輪も三輪も挿してはテンデ一輪挿の趣味でないからです、何時の頃であつたか、年月は能く覺えて居ませぬが、名古屋で茶事に招かれたことがありました、丁度七月の下旬眞の盛暑の候でした、四疊半の小座敷の、窓も障子も全然り開け放して、沓脱から庭はすみずみまで一面に打水の跡涼しげに清められて居る、風爐の松

草庵の松濤塵心を洗ふ

濤を幽に聞きながら席に入つて見ると　勿論眞の茶會といふのではなく、午後から薄茶をといふのであつたのであるが、床に道元禪師の清苦日厚自無塵といふ唐詩の一句を書いた墨跡の、如何にも見事な出來の一行幅を掛けて、その正中に、青銅の德利形の小花瓶に、向日葵をタツタ一輪……然も極て莖短に入れて置かれたので

（正一花譜の内）

青銅瓶に日廻草一輪

鳳輦の御紋章を見るが如し

す、花の輪は頗る大きくて、殆んど中皿程もあります、それが黃金色の艶やかな……畏れ多いが鳳輦を飾る御紋章を見るやうに麗しい色に光つて、それが花瓶の青銅の、地肌が濕れて一際古色を帶びて見えるのに反襯し

た美しさは何とも云ひ得ぬ風情で、その美觀は今に目に殘つて居ます、これは第一に花の色と花瓶の色との調和が好く、又それにその無作意に挿した趣味の氣高いといふことが、この一輪挿に非常な品格を添へて居るといふことは云ふまでもありませぬが、特に注意すべきはこの大きい花を僅に一輪だけ挿したといふ手腕なのです、何程色の調和は可くとも、若しこれを數多く挿した日には趣味は全然零です、モウ二輪と爲つては屹度俗惡な感じが起ります、斯んな派手なそして輪の大きい花は如何しても一輪に限ります。

（正一花譜の内）

見立物の趣味

花器は花との調和が第一なり

一輪挿の花器

花器として作られたものは勿論惡くないが、然し又見立物例へば德利だの水滴だの、その他酒や油などを入れた容器を見立てゝ花器に用つたのも、その形と物質に依つては存外風情のあるものです、花器で好いのは、鶴の一聲と稱する首の長い下膨れの花瓶や遊環付の壺形の花瓶で、これらは如何んな花にも能く調和します、必ずしも一輪挿の小瓶に限る譯ではありませぬ、總體花器はその姿が花と調和するといふことが最も大切な事柄であつて、如何程名器でも花との調和が惡かつた日には一向見立てがありませぬ。

一寸申しますと細長い、例の鶴の一聲の如うな花瓶に、纖細な花……忍冬だとか知風草だとかおじぎ草の如うなものを、加之も丈高く挿したのは見られた狀でありませぬ、脊せた人が高足駄を穿いて高帽でも冠つた

やうな狀で、何だか貧弱な奥行のない、見るから面白味のない感じがするものです、只何でも花でさへあれば可いと云つて手當り次第に突き込んだとて少しも趣味のあるものではありませぬ、斯んな花ならば寧ろ無い方が優です、同じ挿るにしても、これを莖短に、ホンの花のみを挿すといふ風にでもすれば兎に角、今いふやう枝や莖を高く且つ多く挿すといふのは、恰ど無趣味の主人だといふ看板を出して置くのに異りませぬ。

無趣味な主人の看板

裝飾と瓶花との關係

挿花の目的は種々なり

花を挿すには種々の目的があります、單に花を賞觀するといふ場合もあれば、又、それを神佛に捧げるといふ目的の爲の挿花もありますが、最も多く用ひられるのは裝飾用の挿花です、仍ち室内裝飾の一部とするか、若くはその裝飾を補ふ爲に挿す所の瓶花で、これが先づ一番多いです、仍ち挿花といへば殆んどこの裝飾の爲にするものであるやうにさへ思はれて居る程です、だから先づ挿花といふことに就ては勢この裝飾用の挿花に最も重きを措いて述べるのが當然だと思ひます。

裝飾に連關して調和を考ふべし

既に裝飾の爲といふ以上は、如何うしてもその裝飾に關連して、その挿方も花の風情も、それぞれその四邊の樣子に調和するやうに挿すといふのが大切であらうと思はれます、若し然もない時はその調和を缺く爲に、極めて面白くない……面白くない計りでなく、無恰好な、嫌味な、甚きは何となく滑稽に陷つて、挿花も裝飾も兩ながらその趣味を打ち壞されるやうなことが往々あります。

例へば閑寂を主とする茶室に歐風の食卓上に飾るやうな盛花式の花を挿けたり、洋館の卓上に佗趣味の寂しい挿花や流儀花めいた挿花を据るといつた不調和な行り口に爲るのがそれなのです。

茶席に盛花、洋館に茶花

で、挿花を挿けやうとするには如何しても先づ裝飾……その座敷なり又花を置く場所なりの樣子に依つて、その挿方を取捨するといふことが

最も大事であるといふことを忘れては不可りませぬ。

掛物と瓶花の調和

何よりも掛物との調和を要す

食卓の上や棚に飾る挿花は別として、日本風の座敷に飾る挿花即ち床の間の花は何よりも先づ掛物との調和が大切です、勿論その他の裝飾物例之ば置物だとか床の構造だとか、又その座敷全體の裝飾の模樣なども挿花とは深い關係を有つものではありますが、然し最も直覺的に……一寸見た所で大なる關係のあるのは掛幅でありませう。

調和を得ると否とにあり

これは掛幅と挿花とが巧く調和すれば掛物も挿花もその趣味が引つ立つて、その裝飾に生命が出來て、何となく生々とした感じを與へます、然るに若しそれが反對に爲つた時は實に俗惡で、そして不快な感じを起させるのです。

要するにそれは花と掛物とが調和を得ると得ないとの相違であつて、

露店の安掛物も捨て難し

決して挿花の巧拙や掛物の善惡に依るのではありませぬ、假令千金萬金の價ある天下の名幅を掛けても、若し裝飾と取り合はない場合には、殆んど趣味といふものは亡失つて了ふ、然るにそれが巧く調和すれば、露店で得た五十錢か八十錢の安掛物でも云ひ難き好趣味の裝飾が出來上ることもありまする、畢竟それは趣味の一致すると否との爲であつて……趣味の一致といふことは……一寸考へると美いものと美いもの、燻つたやうな粗野なものと同式同型のものを取り合せるのだといふやうにも思はれ、又實際然ういふこともあるのではあるが、然し大抵は反對の一致若しくは調和といふ行り方の方が面白味のあるものです、勿論それとても全然反對する譯ではなくて、或る何れかの點に一致する所がある爲に風情が現はれて來るのです、畢竟それは趣味が一致するのであつて、その反對するやうに見えるのは、只外形に露れて居る形の反對するに過ぎないことも有ります。

何れかの點に趣味が一致せり

恁ういふ場合は趣味……裝飾の生命とも云ふべき趣味が充分に一致して居るのであつて、或はそれも見樣に依つては尙且り一種の正對の調和と云つて可いかも知れませぬ。

大德寺風の一行幅に燕子花の二三本

黃檗か大德寺物の一行幅……それは無論閑寂趣味のものです、表裝も揉紙仕立か、然らずばシケ表裝と云つた……俄富限の人などの目には、何だか廉物のやうな感じのする幅……それにクッキリとして美い砧青磁か染付の鼓形か何かの花入に、若し春であれば燕子花の二三輪も挿す、又秋……秋も晩秋の頃ででもあれば野菊か然もなくばワビスケの一枝ぐらゐを無作と入れた樣子などは、佗といふ方面に於ては眞に絕好の調和です、これは美い花器に美い花、それを美しからぬ例の一行幅などゝ取り合はせたのであつて、一面には反對の調和のやうにも見えますが、然しその趣味は全然一致して居るのです、即ち沈着きのあるといふ所騷がしくないといふ所、一口に云へば地味なおとなしいといふ點が相方の趣味で

地味な點が一致す

あつて、そしてこの趣味が花と掛物とを一貫して能くその連絡を附けて居るのです、だからこれも反對といへば反對で、即ち一方は美しく一方は美しくない、その外形は全然反對して居るものを取り合せて、それを巧く双方を調和させたのであります、先づこれらを反對の調和といふのですが、然しその裝飾の生命たる趣味に於ては双方に一道の生氣が通つて居ることを知らねばなりませぬ。

寂びの裝飾に美い挿花

佗しい裝飾に調和する花。 今いふ如うな、掛物が黃檗か大德寺ものゝ佗趣味のものであれば、瓶花は燕子花か秋海棠のやうな美い花を挿すにしても、その姿……挿し上げた風情は何處となく淋し味のある……淋しみと云つては語弊があるか知れぬが、沈着いた、オットリとした姿に、花を寡く用つて、挿やうも極めて自然的にありたいのです、殊に作意といふことは絕對にこれを避けて、燕子花や秋海棠のやうな美い花を、澁味のある掛物の趣味と一致させるやうに、佗趣味の圈內に取り入れるといふこと

佗趣味の圈中に入れよ

が大切であるのです、モウ恁ういふ場合に花を澤山使用つたり、派手な姿に挿したりしては全くその調和を破壞します。

山寺の春のゆふぐれ來て見れば
入合の鐘に花ぞちりける

何といふ沈着いた、そして寂味のある風情でせう、山寺、春のゆふぐれ、入合の鐘の聲、モウ寂しい極致です、この寂し味に華麗やかな美い櫻の花が如何にもシックリと調和して居ます、佗趣味の掛物に美い花を調和させる極意は即ち茲所なのです。

幽寂の極

華麗なる掛物に調和する挿花

派手な掛物に調和する花の挿し方。 派手な掛物例へば着色の山水風景畫……勿論その畫柄や描きぶりにも依るとではありますが、掛物の全體の趣味が華やかで、クッキリとしたもの、獨り山水や風景に限らず、美人畫でも、武者畫でも、又動物……双鶴に梅花などを描いたものだとか、或は浪に旭日の圖、一品當潮と云つて一羽の丹頂の鶴が磯際に立つて海洋を眺めて居る狀を寫した圖數へて見れば隨分澤山ありませうが、兎に角美はしい圖樣の掛物、又畫幅ばかりでなく書幅てもです、金泥引の大懷紙に和歌を認めたのなどを、色重か、金襴表裝にして牙軸でも附けたのや、詩……詩も七律か長編などの大作を絖本にでも認めたのを繻珍表裝などにしたのなどは總て派手な掛物です、斯ういふ掛物に調和させる花は如何しても華やかな美いものでなくては似合ひませぬ。

武者繪の掛物に櫻の挿花

一體に佗しくて澁味のある掛物には、例の反對の調和で美い挿花が調和するのですが、派手な掛物には如何いふものか佗い花は調和爲ないやうです、勿論時としては二三の例外もないではありませぬが、押並めて派手な花の方が能く似附くやうです、仍ちこの種類の掛物には尙且正對の對の方が可いやうに思ひます。

例へば武者繪の掛物……表裝が茶金襴か何かの美いものであれば、花は古銅瓶に無雜作に櫻を挿けたのなどが可い、加之も枝數を多く、又夏な

黄白の菊花に紅楓一枝

古銅器が最も調和す

れば陶器か磁器又は古銅瓶などに菖蒲でもウント澤山に挿す、若し又掛物が秋景山水の密畫といふやうなものであれば、黄菊白菊を取り交ぜて長短參差とした狀に挿けるか、松に菊……場合に依つてはそれに染めかけた楓の一枝も配ふといふ風に賑やかな狀に挿したいのです。

大懐紙を麗い有職表裝に仕立てた掛物などを掛ける場合には、春ならば歎冬、藤、牡丹と云つたやうな花を、フックリとして奥のある姿に挿けたいです、秋……勿論秋も初秋と晩秋とで違ひますが、初秋なれば秋の七草か、七草の内の二三種を交ぜ挿しにするか、然もなければ木芙蓉、夕顔などの一種挿にするのも悪くない風情です、それから文人風の書幅の美いものには、春なれば梅を横斜自在、即ちその枝が縦横に……殆んど藪蔭か畑の中に咲いて居る野梅でも見るやうな狀に極めて無作意に挿るのですが、斯ういふ挿花には花器は古銅瓶が一番よく調和します、又青磁や黄瀬戸燒の壺なども悪くありませぬ。

掛物の形も挿花に深き關係を有す

畢竟文人風の幅は美いといふ中にも何所となく磊落な趣味のあるのですから、挿花もそれに調和するやうな趣味のものを持つて行かなければ取合が悪いのです。

竪物と横物。 掛物の形狀も亦挿花の姿に大なる關係のあるものであつて、假令花の趣味が掛物の趣味と調和しても、相方の形の釣合が巧く取れなかつた時は結局無恰好な樣子になるものです、竪物といつて丈の長い……半截物だとか、聯落とか、普通に尺五絹本だの、尺二絹本だのと云ふ所の、四尺五寸から五尺程も長さのあるものなどには、挿花の姿を低く蹲まつたやうな狀に挿け、又横物と云つて横に廣く丈の短い、懐紙形などに表裝した掛物を掛けた場合には、挿花の丈を高く、スラリとした姿に挿したのが能く釣合ひます、然れど又花の種類に依つては横幅に丈の低い姿の挿花を配つたり、竪物に丈の高い挿花を配置したのが大變に好い調和を得ることもないではありませぬ。

月に雁の半截幅に配ふ花

例へば半截の紙面に、月と雁でも描いたスッカリとして掛物を掛けて、尾花か女郎花を思ひ切つて丈高く挿すとか、又僅に一羽か二羽の蝶ばかりを描いた横幅を掛けて、それに潰れたやうに低い狀の籠花器に、莖短に牡丹の二三輪を……莟一つ、半開一つ、滿開の花一輪といつたやうな配置に挿した瓶花を配つたのも却々に好い樣子です。

美人の盛裝して裾を引けるに似たり

總體半截や長丈幅に丈の短い挿花を配つた樣子は、婦人が盛裝して裾を引いた姿のやうに、緩やかでそして優麗な感じがあつて、座敷がユッタリとして見えます、又横物に低い挿花を配つたのは、禮服でも着て坐つたやうな樣のあるものですから、兩方ともに極めて端正な姿ではありますが、其處には又立つて居るのと坐つて居るのとの如き相違があるのであるから、此掛物と挿花との關係が裝飾の全體に非常の影響のあるといふことを呑み込んで、花を挿すにもその釣合の良否が裝飾全體の趣味を助けもし又打ち壞しも爲るものであるといふことを知らねばなりませぬ。

花の種類に依ることを知れ

然しそれもこれも花の種類に依るとであるから、決して一概には云はれませぬが、若し低い姿の挿花を挿さうといふ場合には、丈の低いそして莖短に花が咲くもの選び、又高い挿花にはスラリとした……性來丈の高く延びる種類の草木を選むといふことが肝要です、薄や菖蒲のやうなものを低く挿けたり、牡丹や寒菊のやうなものを丈高く……比較的高く挿すといふことをしては全然趣味を傷つけます、況して龍膽だとか、鷺草だとか、細辛金盞花の如き些やかなものは、殊にこれを莖短かに且つ一體の姿を低く短く挿けるのが可いやうです。

菖蒲は高く寒菊は低く挿せ

若し恁ういふ些やかなものを、掛物との釣合上高い狀に挿さうといふ場合には、高卓の上に花瓶を置くか、さもなくば花瓶を棚物の上に据ゑてその姿を高くするといふ手段を取らなければなりませぬ。

大幅に小き挿花は調和惡し

大幅と小展物。 大幅には挿花も大きくなければ調子が良くありませず、小展物を掛けた時は矢張り挿花も些やかな方が能く調和するもので

老松に山百合、すゝき、卯の花の交挿

す、大幅……全紙のやうな大きい掛物をかけてチツポケな挿花を配つたのは絶對に不調和ですが、然し小展物を掛けて五種も七種もの花を交ぜ挿にした大きい挿花を置くといふ行口は……丁度山の峡からさし上る月を見たと云ふ樣で、その小い掛物と分量の多い大いなる花とを巧く調和させたのが、時としては又非常な好い趣味の裝飾となることもあります、然し之は全く例外であつて、何時も巧く行くとは限りませぬ、例へば松……幹樹に苔が蒸した老松を主體として、それに山百合、すゝき、薔薇、卯の花などを大い瓶にウンと澤山に挿し交ぜて、四尺五寸床か洞床のやうな……小締りした床の、殆どその三分の一程も挿花で埋めて、床壁に金色紙に墨畫の時鳥の一羽ぐらゐを描いた小展ものか、然もなくば歌か俳句の短冊などを袋表裝にでもした小い掛物を掛けて釣合を取るの類です。

けれども普通は小さな掛物を掛けた場合には、やはり宗全籠か然うでなければ佗式の籠花器に一寸した輕い花を入れたり、又は一輪挿式の些

倦た籠に輕い花

古銅瓶に白玉椿一輪

やかな花が能く調和致します。

小さな掛物に最も能く調和して加之も品致のあるのは中央卓を据ゑて下段に小花瓶を置き、それに掛物の趣味と調和する輕い花を挿けるのです、掛物の種類にも依りますが、色紙短冊類を表裝したものや、又少し大きくても狩野か土佐か、その他消息文などの横物を掛けて、前に中央卓を据ゑ、青磁か古銅の小花瓶に白玉椿の一輪挿といふ行り口は如何にも上品でそして嫌味のない風情です、床は勿論大きく、座敷も十疊か十五疊敷といふ……先づ日本間としては廣い室でも座敷がチンと締つて見えます、花は椿には限りませぬ、秋ならば蜀葵、木芙蓉、夏であれば百合、牡丹、少し品は勿論惡いが美人草なども中央卓の花として好い趣味です、又春の花では福壽草、水仙、小田巻草などは皆能く調和致します、但し何れかと云へば輪の小さな花よりは大きいものゝ方が好いやうに思はれます。

櫻の掛物に櫻の挿花

禁忌。 形式の如何に拘らず避けたいのは櫻の畫の掛物に櫻の花を挿

すとか、山吹の圖の掛物を掛けて山吹の花を挿すといふ爲方です、これは同じものが重複するのですから見て面白味のない許りでなく、時としては厭はしい感じの起ることもあります。

勿論畫に描いた花の美と生花の美とは觀賞の主旨が違ふから構はぬやうなものゝ――例へば一筆がきか水墨などで一寸輕く描いた椿などは、無論寫眞などに比べて見ればその精粗は決して同日に論ずることの出來るものでないが、然し又その筆の使ひ樣や落墨の樣子に殆んど實物を凌ぐ程の生氣の動いて居る點もあつて云ふに云はれぬ妙味があり、又生花の方には生花の自然の風情があるから、到底兩者を比較してその優劣を論ずるといふことは出來ぬものであります、それを強ひて比較しようとするのは酒と餅の優劣を爭ふと同じです、酒には酒の趣味があり餅は又餅でその甘味があるから、その風情は全く別のものであるのを、それを何れが好い何れが惡いと云つて爭つても到底議論は盡きませぬ、この

絵と實物とは趣味が違ふ

二つ……畫の椿と實物の椿、假令觀賞の目的は異ふにしても、云はゞ同じものを並べて見るのであるから何だか優劣を競はせるやうで、如何にも面白くないことです、又如何に能く描かれた畫だと云つてもそれは、到底も實物が備へて居るやうな生きた風情といふものは求めることは出來ないのですに、それを並べて比較するといふことは、見やうに依つてはその繪畫の……繪の筆者を侮辱するやうにも見えて面白くありませぬ、のみならず掛物の畫と同じ花を挿けるといふこと……南天の畫幅を掛けて南天の花を挿したり、牡丹の圖の前に牡丹の挿花を置くといふことは、丁度牡丹餅のあとで汁粉を食ふやうなもので、全く面白味もなければ風情もなく、趣味は殆んど零であるのです。

それから今一つ避けたいのは……隨分相當の人でも行ることで、例へば松の圖を掛けて梅と竹とを花瓶に挿し、これで松竹梅で御座るといふ行り方ですが、あれは極めて拙劣な意匠で、高尚家は決して行らぬことで

優劣を競はするは惡し

掛物と花を合せて松竹梅といふ俗な意匠

す、斯ういふやうな意匠は、何程その花が巧く挿つても、又掛物が元信とか探幽といふやうな名人の描いたのを掛けても、意匠が俗である爲に風情も趣味も殺がれて了ひます、更に甚いのに爲ると、掛物の繪が松で花器が竹、花が梅であるから、松竹梅だ、などといふのがありますが、これらは殆んど問題に爲らないのです。

掛物の意味と挿花の關係

掛物の畫題又は詩歌の意味と挿花の關係。 これは掛幅の形とは全然で別の問題であつて、幅柄や掛物の趣味が調和した上に、更に掛物の畫なり又その書いてある詩歌なり俳句なりの意味と、挿花との關係をいふのです、例へば彼の有名な藤井竹外の芳野懷古の詩を書いた掛物をかけて櫻の花を挿け、芭蕉の古池の句の掛物をかけて山吹を挿けるといふ行り口、これらは可なり優れた意匠と云つて可いのです、又然うでなければ月の繪に七草の挿花、梅花の詩歌や俳句の幅を掛けて梅花を挿すといふは決して惡くはないのです。

俳諧の附合の如し

つまりこの掛物の意味と挿花の取合せは丁度俳諧の附合のやうなもので、離れたやうで結び付いた所のある……如何うしても動かぬ關係のあるといふことが肝要なのです、全然懸け離れて緣のない……掛物と花とが沒交渉でも困りますが、然りとて又餘りにピッタリとクッ附いたのも面白くないのです、恁ういふことは花道の上に於て最も趣味のあることです。

有聲の詩

と柄であつて、双方相俟つて一つの意義を作り上げるのであるから、有聲の詩とでも云ふべき極めて面白いことであるのです、仍ち挿花の方を本位で云へば、花で以て掛物の趣味なり意味なりを補ひ助けて、恰も畫に賛をすると同じやうな調子にするのです。

私の知つて居る某といふ茶人が、確か時は十月頃かと覺えて居ます、賴政の三首懷紙をかけて、釣花器……竹の釣舟形の花入に山吹の返り咲を二枝程入れて茶事を催したことがありましたが、之れは實に巧者な行り方で且つ優れた意匠なのです、それは例の源三位の「山吹の瀨にかげ見え

山吹の瀨にかげ見えての歌意

て」といふ歌の意から取つたのであつて、彼の歌を挿花の題にして斯く山吹を挿し、又釣舟の花器はそれを宇治の柴舟に見立てたものだと思ひます。

裸馬の掛物に菜花の挿花

私は俳人横井也有が、裸馬の繪に「春はまだ寒し野飼のはだか馬」といふ賛をしたつまらぬ掛物を持つて居ますが、或時それを小間の床に掛けて、下に煤竹の菜籠形の籠花器に、菜の花を二株挿して人を招いたことがありました、この取合せを大層譽めて呉れた人もあり、又自分でも密かに面白いと思つたのです、誇るやうでをかしいかは知らぬが瓶花と掛物との取合せは恁う行かなくては面白味がありませぬ。

花の種類と掛者の選擇

掛物の恰好と花の種類　掛物の恰好に依つて瓶花の姿を取捨せねばならぬことは、前に云ふ如うに非常に大切な事柄でありますが、それのみでなく、花の種類に依り又幅の方もです、その繪樣や書いてある詩歌俳句の意味に依つても、尙種々の工風を要するのです、單に掛物の恰好といふ

ことに就ても、その挿すべき花の種類に依つては又それ〳〵その選擇を爲ねばなりませぬ、それは挿すべき花の種類に依つてその挿し上げる瓶花の姿にいろ〳〵の變化を現はすからのことです。

掛物に取合の好い春の花

低くさへ挿せば可いからと云つて、丈の高く延びるべき性質のものを短かく切り詰めたり、高く挿けなければ幅柄と調和せぬからと云つて、「低く咲くべき性質の草木を高く挿けては如何も風情がありませぬ、然しそれらの事は花木の性質にも依ることですから一概に定めて云ふことは出來ませぬが假りにその一斑を擧げて見ますれば左の如くである。

如何なる掛物にも調和する花

春の部

○松に梅の交ぜ挿

○梅

○柳
○梅に椿の交ぜ挿
○椿
○辛夷
○木蘭と山吹の交ぜ挿
○山吹
○海棠と木蘭の交ぜ挿
○藤
○桃花
○桃と藤と山吹の交ぜ挿
○山茱萸
○山茱萸と椿と小手球花の交ぜ挿
○蓮翹と椿の交ぜ挿

掛物に取合の好い夏の花

夏の部

○牡丹
○芍藥
○燕子花と若葭の交ぜ挿
○薔薇花
○松と薔薇の交ぜ挿
○卯の花
○松と卯の花の交ぜ挿
○柘榴花
○蓮と葭の交ぜ挿
○百合花
○百合とすゝきの交ぜ挿

○蜀葵
○河骨と燕子花の交ぜ挿
○紫陽花と糸すゝきの交ぜ挿
○夏菊と糸すゝきの交ぜ挿
○松と夏菊の交ぜ挿
○花菖蒲
○薊と布袋草と糸すゝきの交ぜ挿
○水葵

秋の部

掛物に取合の好い秋の花

○木槿
○桔梗
○女郎花

○女郎花と薄と藤袴の交ぜ挿
○木芙蓉とすゝきと水引草の交ぜ挿
○雁來紅と芒と萩の交ぜ挿
○七草の交ぜ挿
○黄蜀葵と糸すゝきの交ぜ挿
○松と菊の交ぜ挿
○菊一色
○松と菊と紅葉の交ぜ挿
○紫苑
○月見草と糸薄の交ぜ挿

冬の部

掛物と取合の好い冬の花

○水仙

○八朔梅と寒菊の交ぜ挿

○南天竺と水仙の交ぜ挿

○梅もどきと殘菊の交ぜ挿

○寒紅梅

瓶花と置物の調和

挿花と置物とを調和せしめよ

床の間に置く挿花は如何しても他の調度……床に置く裝飾物との調和を得るといふことが肝要です、これは尙且り花と掛物との關係が大切なると同じで、若し床を飾るべき他の調度との調和を缺くやうでは折角の挿花が生きて働きませぬ、甚だしいのになると花のみが他の裝飾から孤立して、全然木に竹を接いだやうな感じの起ることもあります、だから如何しても……若し置物でも飾る場合には、その置物の種類、趣味、形式等を考へ合せて、それぞれその趣味や形式に調和するやうな花を挿すといふことが肝要なのであります。

配列すべき調度の趣味さま〳〵

置物には種々のものがありますが、先づ普通多く用ひられるのは、人物の置物、動物の置物、料紙硯箱、料紙文庫、文臺、香爐、卷物、書冊、手箱、香道具、置時計、太刀、佛像、儀式的裝飾物、例へば蓬萊、島臺その他の器具であります。

一　その趣味の調和すること

料紙硯箱にしても手箱にしても、又香爐、書冊、繪卷物等、その種類の如何に拘らず、その物に依つて趣味はいろいろに異つて居ます、同じ香爐といつても、文人風の銅製や磁製の鐘だとか鋼だとか、又鼎形のものだとか、その外砿や染付のものと、それから又同じ青磁燒の內でも千鳥形と稱する所の聞香爐式のものだとか、蒔繪に鍍金の罩のかゝつた火取香爐とは全然その趣味が違ひます、又黃瀨戸、五本、仁淸といつたやうな茶人風のものには又それ〴〵別樣の趣味がありますから、一口に香爐といつても總て

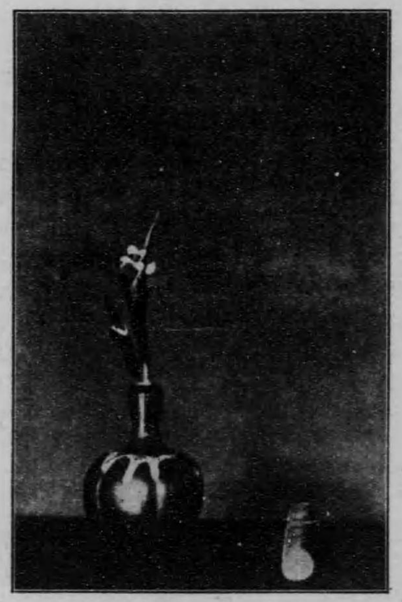
を同じやうに見ることは出來ませぬ。

ですから、それぞれその趣味に依つて、……文人風の香爐を飾る場合には、これに配ふ挿花は、是非とも磊落な、南畫などに見るやうな狀の瓶花でなくては不可らず、又茶人風のものだとすれば、冬ならば寒菊と佗すけの挿し交だとか、枯葦に四季咲の燕子花の：花が萎けて咲いたのでも挿し交ぜる……加之もそれを籠花器か竹花入などに、佗しい樣に挿さなければ調和致しませぬ。又書冊や卷物類や硯箱などでもさうで、例へば詩集だとか古法帖のやう

（正一花譜の内）

枯葦に冬の燕子花の交挿

な物と、歌集、物語ものとは全く趣味が違ひ、又蒔繪の料紙硯箱と、丹溪の古硯を紫檀か黃楊木の薄盆に載せて飾つたのとでは其趣が全く違ひます。況して天平式の古佛像を飾つた時と、競馬香、芳野龍田香、矢筈香などのやうな東山式の香道具や文臺に、短冊でも載せて置いた時とはモウ全然で樣子が異ふものであるから、この裝飾を補ふ所の挿花は、如何してもそれに調和するやうなものを選んで、それぞれその趣味を一致させる工風が大切なのです。



天平式の古佛像を飾つた時

即ち武張つた置物には花も武張つた趣味に、閑寂な置物には花も矢張

武張つた置物を飾る場合

り物寂かで侘しげな狀に挿し、優麗な置物を飾つた時には濃艶な花を挿ける、又蒼古な置物には沈着いて品の好い姿の花を配ふといふやうにしなければなりませぬ、涙手で華やかな置物に茶人式の侘しい……例へば枯葦に龍膽の一株といつたやうな花を挿けたり、仁清や古萩の極寂な香爐にダリアやチューリップのやうな濃艶りとした洋種の花の挿し交ぜの瓶花は到底も調和しませぬ、却つて滑稽な感じがして裝飾の美を……花の方の趣味も置物の方の趣味も、全然打ち壞されることに爲るのです。

大なる置物には大なる挿花

二　大小の釣合

大なる置物に小さい挿花……これも時としては非常に風情のあることもありますが、然しそれは餘程巧く出來た場合で、大抵は不釣合な、無恰好なのが多いものです、だから先づ何れかといふと大きい置物や調度を飾る場合には、挿花も大いなるが能く調和し、小い置物を据ゑた時は矢張り瓶花も小さくて輕い挿し方にするのが好いやうです。

丈の高い置物には丈高い花

三　高低の釣合

丈の高い置物を飾つた時に花を丈高く挿して釣合を取ると云ふことも一寸面白いです、巧く行れば決して惡くありませぬ、何時であつたか我が長春閣で雅集を催した時に、六尺床に廣瀨淡窓の、花點佛身云々といふ七絶半截の掛物をかけて、左の方に四尺程もある印度佛を飾り、右に倚せて黄瀨戸の花瓶に櫻を……彼岸櫻

古佛像に櫻の折枝の取合せ

を極無雑作に三枝計り……佛像よりも高く、殆んど花の梢が五六寸も佛像の上へ延びたのを置いたことがありましたが、半截の掛物に立像の古佛、それに丈の高い櫻の挿花、いはゞ長いものヅクメで、一寸考へると釣合が悪いやうに思はれますが、然し、その時は如何にも能く調和が得れて非常に面白い裝飾と見ました、これは掛物の詩の句から思ひ付いた飾付けで、古色蒼然たる古佛像に美しい櫻の花、それが殊に好く調和して何とも云へない程に物寂かな趣味が漾うて見えました、これは第一に趣味の調和を得た爲もあらうが、一つは又花と置物との高さが巧く釣合つたからであると思ひます。

若しこれが釣合が悪くて、置物の方が非常に花よりも高く、花の高さと置物の高さとの釣合が悪いと云ふやうな場合には、殆んど見られた狀ではありませぬ、例へば手箱類や……面箱のやうなものを飾つて、それに一輪挿の小花瓶に菊か何かを一本挿すとか、又平盆か水盤のやうものに

花と置物の丈くらべ

丈の低い花を入れたのを置き添へたとする、これは實に不調子な、恰好の悪いものとなつて、風情も趣味も全く零であります。

が、これは花と置物との高低が揃はぬ……一致せぬからだと云ふのではない、大抵はその高さの揃はぬ方が……斯道の言葉で云ふ所の背くらべを爲ない方が可いのです、だから何方かと云ふと置物と花の丈とには多少高低の差ひがありたいのです、然れども今いふやうに置物が高くて花の方の低いのは……多くの場合には調子が悪いものであります。

が、置物の方が低くて花の方の高いのは、大抵その調和も釣合も整つて見えるものです、だから丈の高い花の得られない時とか、趣味やその他の調和の上から櫻草だとか水仙とかといふやうな丈の短いものでなくては調和せぬ場合には、殊更に高い臺を使つてまでも挿花の姿を高くすることもあります。

薄つ平な盆……春日盆か四方盆のやうなものに香爐を据ゑて飾つた

偏平な置物に高い花

時、これらは低いといふ内にも低い置物であるが、然しこの低い置物に：

：これに秋季ならば、薄と紫苑の交ぜ挿や、菊、籬下に捨て作りにしたよろよろ菊を丈高く掴み挿にしたのや、又夏なれば細長い壺形か四方形の銅瓶などに、花臺は使はないでそれを薄板にでも載せて、菖蒲の紫と白とを取り交ぜて、男らしく極めて無作意に挿して、而て斜に香盆にでも對はせ置いたのなどは非常に好い趣味であります。

又、一方には卷物盆に畫卷を載せて飾るか、二三種の文集でも置いて、春なれば木瓜か辛夷に春蘭の一株程も配つて、それを比較的背の低い銅瓶に挿して、それを斑竹か黄楊木の高卓の上に載せ、置物と挿花とを高低せしめてその釣合を取つたのも却々に風情があります。

辛夷と木瓜と春蘭の交挿

趣味は調和するも高さの釣合の惡きは不可なり

恁ういふ工合に花と置物とを不平均に、背丈の揃はぬやうに一高一低せしむるといふことも一種の意匠であります、何程花と置物との趣味が調和しても、双方の高さが背比べをしたり、さうでないにしても……殆んど高さが揃つたのは、全然釣合を失ふものですから、花の丈の高いものは兎も角、然うでないものは別の臺を用ひてゞも構はぬから双方の間に高低を作るといふことが大切です。

四　色の調和

美麗なる花には蒼古なる置物を可とす

置物と花の色の調和といふことも亦大切な一つの條件であります、これには多くの場合に反對の調和が面白いやうに思ひます、即ち美麗りとした花には蒼古な置物が能く似付き、華やかな置物には澁味のある色の花が調和致します、然るに若し黒ずんだ人物の置物を据ゑてそれに木犀や春蘭や水引草や柳といつたやうな花を配つては、全く裝飾が眠つて了つて少しも引つ立ちませぬ、如何しても然ういふ置物を据ゑた場合には、春ならば牡丹や燕子花等は勿論好いとして、其他木ものであれば椿、櫻、木蘭のやうな派手なもの、草ものでは櫻草、甘草、美人草などの如うなもので

黒ずんだ置物に派手な瓶花

なくては調和りませぬ。

又置物が派手な美い色のものである時は、花は却つて派手でないものの方が能く調和します、然し派手な置物と美い花との調和……即ち正對の調和は、所謂錦上に花を添へたといふ樣子があつて、地味な器物に蕭疎な花との如き不調和は少しもないものです。

所謂錦上の花

蒔繪の手箱に眞紅の紐を附けて飾つた時に、一方に青磁の花瓶に牡丹の一枝を投げ挿しにして配つた樣子は實に眼が覺めるやうに美い、加之も厭味や俗氣は少しもなくて、優麗とか華美といつた氣趣が溢れて見えまする、これらは恐くは色の調和では最上であらうと思ひます。

床の間と挿花

床の構造と挿花の關係

單に花を賞觀する目的で挿けた花でも、又裝飾の爲に……室内を裝飾るの目的で挿す花でもです、日本風の座敷では大抵これを床の間に置かれます、從つて床の間の構造や大さが少からず挿花に關係を有つものですから、花と掛物又花と置物との釣合を考へる如うに、床の樣子に依つて瓶花の趣味にも姿にも多少の工風が必要なのであります。

床の構造は多種なり

床の間の種類に依つて挿花に用捨あること。 一口に床の間と云つてもその種類は幾許つにも分れて居ますから、挿花もその床の形式に依つてそれ〴〵工風を爲なければ釣合を得ないことがあります。

床の大きさは座敷の廣狹に準じていろ〳〵あつて、廣い座敷は床も廣く、狹い座敷は如何しても床が狹い、只狹いのみでなく、中には樣々の變體……普通の床とは狀の變つたものがあります。

普通に廣間の床と云へば大抵一間に奥行三尺、世間で一間床といふのが多く、又それよりも廣くなれば九尺床若しくは二間床などといふのもあります。

六疊以下の小間の床の間

又六疊敷、四疊半以下の小間の床は、多く四尺五寸に三尺とか、三尺に三

尺の床とか、その外に又洞床といつて床の前半分程を窓付の壁にしたもの……丁度押入の前に半ば壁を附けた如き狀のがあります。

床の間の正式の造り方はそれへ床疊を敷くのですが、時としては一間床、四尺五寸床、三尺床、洞床などは板敷にすることもあります、それが又却々に趣味のあるものです。

又床の大なるものになると、二疊床三疊床といふのもありまして、これを一口に云ふと、二疊の間や三疊の間が上段の間に爲つたといつた調子に出來て居るのです、これは書院や大廣間の床として高趣な普請に構らはれるのであつて、床としては最も趣味もあり且つ品致があるから、從つて花を……瓶花を飾るには非常に都合が好いのです。

そこで普通は先づ大きい床には大きい瓶花が調和し、小さい床には小さい花が能く調和します、が又時としては大きい床に小さい花を置いて非常に好い樣子の裝飾となることもないではありませぬ、然しそれは花

大なる床には大形の花が調和す

の姿が極く上品で、そして花の種類も椿……椿も白玉だとか、梅、菊、水仙といつた品致の高い花の時に限られるのです。

南天やダリアやコスモスのやうなものを廣い床に少しばかり挿けたのは如何も調子が好くない、それと同じで狹い床の間にコテコテと澤山な花を、加之も大きい花形に挿したのも亦釣合が惡い、勿論これにも一二の例外はありますが、普通は花の大小……挿花の大小は先づ床の廣狹に比例すると思へば間違ひはないのです。

洞床に掛花。 花の種類にも依ることであつて一概にいふことは出來

垂物を床の胴釘に掛く

ませぬが、花も垂れ物、即ち山吹だとか萩だとかといふものを、洞床の壁釘に掛けた籠花器に、枝數多く挿したのなどは實に絶好の趣味です、淺綠の葉の間から黄金の玉を括つたやうな莟を見せ又その所々に遊蝶の翅を張つたかと思ふ様な美い山吹……特にその單瓣の花を附けた清鮮な狀は到底も言葉には盡されませぬ。

金蝶の翅を張れる山吹の垂挿

又萩なども然うで、軟かい……天鵞絨などで造つたかと思はるゝ程に軟かみの見える葉の其所茲所に、紅色の可憐らしい花をつけた枝が、フーワリとたわんだ工合……加之もそれが薄暗い洞床の一方から耻しさうに枝の先の一部を露した様子は、春の山吹と共に恐くは垂挿の双璧だらふと思ひます。

洞床は垂物のみでなく、椿、牡丹、木芙蓉といつたやうな輪の大きい花を一輪か二輪燻んだ花器に入れて、例の胴釘に掛けた沈着いた狀も亦捨て難い風情です。

洞床の壁に白玉椿や牡丹の一輪挿

挿花の行り方もいろ〳〵ある内に、日本風の座敷の挿花としては、裝飾と花賞翫との二つの目的を兼ねて、加之も奥床しみのあるのは先づこの洞床の花だらうと思はれます、畢竟これは美い花を洞床といふ陰闇なほど地味な場所に包んで見せる爲であつて、彼の柳暗花明といふ詩句の如く、陰陽の釣合が可い爲に一層花の美麗を増すのだと思ひます。

洞床の花は柳暗花明の詩趣あり

洞床の置花。 洞床は掛花に能く調和する計りでなく置挿にも亦却々に趣味がありまする、掛物の様子にも依りますが、例之ば色紙か懐紙、若しくは短冊などを表裝した上品な掛物をかけて、砧青磁か古銅製の形の締つた花器に、椿、牡丹、百合花などを僅の二三輪挿したその沈着た狀は、彼の萩や山吹を壁釘に掛けたのにも劣らぬ好い風情であります。

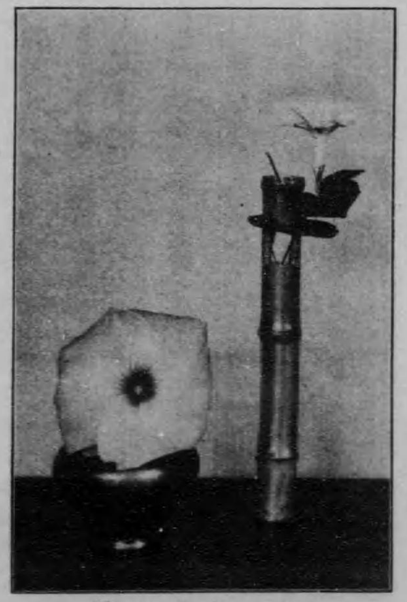
洞床の置花

要するに洞床は床そのものが既に幾分か陰暗な場所であるから、花は成るべく美くて明るみのある種類のものを選びたいのです、佗しい花や澁味のある花、例へば地楡、木賊、木槿、鋸草、春蘭といつたやうなものは絶

朝顔の一輪挿と蜀葵の一輪挿

對に調和しないのです。

茲に示した二個の瓶花は、朝顔の一輪挿と、蜀葵の一輪挿であつて、兩方とも全く作意のない、眞の自然のまゝを挿けたのですが、花も葉もチャンと据つて居ります。



（正一花譜の内）

從來の挿花者の方では一輪挿と云へば、花瓶の形が定り、そして又其置く場所も、中央卓の下だとか、棚の上だとか、机の上とかに据ゑるもの極めて、加之も椿の一輪挿などには、半截の葉を是非とも一枚は用ふるものだ、などゝ云ふ掟がある爲に、挿け上げた花が極めて窮屈なものに爲つて了ひます、決して自由の天地に逍遙するなどゝいふことは思ひも寄らないのです、然しこれを前圖のやうに挿しますれば、如何んな花を如何んな花器にでも挿すことが出來て、其上に趣味の極めて豐富な瓶花が出來るのであります。

瓶花季寄

春の瓶花

洞床に挿して調和のよき花。 佗しいものや、澁味のある花は洞床の花として調和せぬとは云ふものゝ、然しそれも掛物との釣合にも依り又置物との取合せ、花瓶と花との調和の如何に依つては、一概に惡いとも申されませぬ、又如何んな澁い花でも草でも、若しそれに美しい花を少し添へますれば、案外趣味の出來ることもあるのです。

試みに茲に床の挿花として最も相應しいものを記して見ますれば、

瓶花季寄

春季

菜の花、一種挿、掛、置共によし

椿、一種挿、殊に一輪挿に風情あり、掛、置共によし
梅と椿の交ぜ挿、掛、置共によし
木蘭、一種挿、置挿によし
山吹、一種挿、掛挿によし
桃、白の一種挿よし、置挿に限る
連翹、掛挿によし
金盞花、置挿によし
萱草、掛、置共によし
躑躅、一種挿に限る、置挿の方風情あり

夏季

牡丹、一種挿、置挿によし
芍薬、一種挿、置挿によし
杜若、一種挿、置挿によし

けし、一種挿、置挿によし
卯の花、一種挿、掛挿によし
繡球花、一種挿、掛挿によし
沙羅双樹、掛、置挿共にもよし、一輪挿も可なり
百合、掛、置共によし
藤、掛花一種挿風情あり
河骨、置、一種挿によし
忍冬、掛花、一種挿によし
常夏、一種挿、置、掛共によし
玉簪花、一種挿、置花によし
月見草と糸薄の交挿、置挿によし
牽牛花、一種挿、掛花に殊に風情あり

秋季

萩、　掛花に限る

夜會草、　掛、置共によし、一種挿に風情あり

木芙蓉、　掛、置共によし

芒花、　置挿に限る

黄蜀葵、紅蜀葵、　單に一種挿の掛花、又は糸すゝきなどを配ひて置挿にするも風情あり

菊、　置挿に殊に風情あり、

紅葉と菊、　置挿に尤もよし、但し枝の都合にて掛花も惡しからず

冬季

殘菊、　置挿によし

寒牡丹、　置挿に限る

寒菊、　置、掛共によし、然れど置挿の方風情多し

冬の瓶花

盛花

盛花の起原

盛花の流行

近來盛花といふことが大分世間の評判に成つて、挿花といへば直ぐ盛花を連想する程で、殆んど投入花と盛花とは並稱するといふ有樣であります、然しそれは聲のみで、實際盛花は挿花ほどに未だ世間に行はれては居ないのです。

歐風の盛花は日本の座敷に不調和なり

要之りこれは盛花といふものが現時の日本座敷の裝飾に調和しないからでありませう、一體日本座敷の裝飾といふものは、清楚とか閑雅とかいふ……何れかと云へば澁いといふ方の趣味に富んで居るのですから、それへ紅綠紫黄絢爛目を奪ふ華やかな盛花は如何うしてもその裝飾が不調和に陷る傾きがあつて面白くないからでもありませう。

が、それは歐風の華麗やかな盛花のことであつて、日本風の盛花であれば

決して日本座敷の裝飾に調和しないことはありませぬ、一廉の裝飾として充分にその役目を務めることが出來まする、日本式の盛花は、盛方に依つては雅味のある行り方にも、品の好い清楚な趣味の盛り方にも、又優艶にも、高雅にも、自由自在に日本流の座敷の裝飾と調和の出來るやうに盛ることが出來ます、夫れを今日世間で盛花と云へば、一概に歐風の濃厚りとしたものゝみのやうに思うて居るのは大なる間違ひであります、日本にも盛花は古くから行つたことがありました、それが何時の間にか瓶花の方が盛に行はれた爲に、盛花の方が廢れて了つたのであります。

如何やうなる趣味にも盛り得らる

盛花の歴史は古し

盛花の變遷

盛花……盛花といふ名はあつたか如何うかは能く分りませぬが、兎に角日本では古くから盤上に花を盛るといふことはあつたもので、歴史をいへば、却て瓶花よりは古いと云つても可いかと思はれます。

それは裝飾にも使用つたこともありますが、初めは佛前に捧げるといふことの爲に用ひたもので、盆にも鉢にも籠にも盛つたものであります、然しそれは今日我々の行るやうに、花のみでなく葉や果實などを添へて盛るのではなくて、唯摘み取つた花を……加之も莖短かに、眞の花のみを盛つたものらしいのです、それは既う奈良朝の頃から行はれたもので、此時代には隨分盛にこの盛花が流行したものらしいのです。

それが平安朝から源平時代となるに隨つて段々と廢れて、何時とはなし瓶花に變つて了つたものらしい、前にも申したやうに、昔の盛花は裝飾とか賞觀といふが主意ではなく、佛に供養といふことを目的としたものであつて、又その盛花に代つて流行し始めた瓶花も、始めは矢張佛前に供へる……即ち佛の供養といふことのみに用ひられて居たものらしい、それは後撰集に

折りつれば手ふさにけがる立てなから

昔の盛花は花のみを盛りたるものなり

盛花は次第に廢れて終に瓶花に流行を奪はる

三世のほとけに花たてまつる

などゝ詠まれて居ます、これは折り取つて手向けたならば、手の爲に汚れる、で、生えて居るまゝこれを奉りて佛の供養にする、といふ意味であります、この歌を見ても、手折つた花を瓶に挿して、そして佛の供養にしたといふことが能く知られます。

瓶花が盛花に代つて佛の供養の一つとなつたといふのは、瓶花の方が盛花よりも趣味が多いとか、瓶花は盛花よりも花の命脈が長い、といふやうな理窟からではなく、畢竟流行に感觸れたので、一口に云ひますと、盛花は古めかしい、それよりも今流行する瓶花の方が氣が利いて居るとか、目新しいとかいふ……要之り新奇を好む一種のハイカラであつたのだらふと思ひます。

挿花の流行は一種のハイカラなりしなるべし

斯ういふ風に始めは新を好むといふ爲に行つたのが、何時の間にか一つの習慣となつて了つて、佛前の供養の花は瓶花を用ふるものだといふ

やうに人が思つて了つたのでありませう、それが後には佛殿の裝飾となり、又一轉して普通の家の座敷の裝飾にも用はれるやうに爲つて今日に及んだのであります、恁ういふ風で瓶花は元とは尙且り佛の供養の爲に出來たものであつたのですが、永い月日の内に終に座敷の裝飾となつて盛に行はれ、そして盛花の方は單にそれを佛の供養のみに用つて座敷の裝飾には使はれるといふことはなくて終つたのです。

日記物語等にも盛花の記事あり

で、昔から日記や物語を見ますると、盛花――盛花とは申しませんでしたが、實質は盛花です――のことは總て佛の供養の爲にしたもののやうに書いてあります、又古くはこの盛花が儀式などの場合にも用ひられたといふことは、花を盛る器物の名稱が當時の記錄や、古書に載つて居りまする、即ち彼の花ざらといふのは花を盛る器で、花筐は花をつみて入るゝ籠の名、又源氏にある花づくゑは盤花をのせる机のことです、又江次第の乞巧奠の條に、華盤一口とあり、或は蓮華十房などとあるのは、七夕祭に手

花供の料に野山に花を摘む

向の盛花のことを記したのであります。

この盛花即ち花を摘み取つて盆や華盤に盛つて手向けるのを花供と申しまして、この花供の用に供する花を、昔は貴人でも自ら野に出ていろいろの花を摘み取つたもので、そして又その花摘みといふことが一つの遊樂となり行事ともなつたといふことは、古今集に

やよひつごもりの日、花つみよりかへりける女ども云々

とあつて、これは例の花供に用ふる花を、野山に摘みに出て歸る女のことを申したのです、又花摘みのことは躬恒集に、

鶯はいたくな鳴きそ移り香に
めでゝ我摘む花ならなくに

といふがあり、又六帖には

舟岡に花つむ人の摘みはてゝ
さして行くらん方やいづこぞ

花摘は優美なる遊樂

盛花の名殘を留むる果物盛り

佛手柑に梅花一枝

などゝといふ歌が詠まれて居ます。

既にこの盛花が高趣なもので、又その材料の花を摘む所の花摘みといふことが一種の優美な遊樂になつた位でありますから、盛花といふことが如何に盛に流行したかといふことは大樣想像されませう。

然るにこの盛花が何時の間にか瓶花にその領分を奪はれて了つて、近代に及んではモウ盛花といふものは如何んなものであるか殆んど知らぬやうにまで爲つたのです、只僅かにその名殘を留めたのが……留めたのではない、昔の盛花に似たものが出來たといふのは、文人家の行る果物の籠盛で、これは籠にその時々の果物、例へば佛手柑だとか柘榴だとかいふ、姿に風情のある果物を盛つて、それへ一枝の花を添へて飾る……所謂花果の籠盛です、これは昔の盛花のやうに佛の供養ではなく、專ら裝飾用として文机の上や棚の裝飾に用ふるもので、文人風の裝飾には、モウ是非なくてならぬ物のやうに爲つて居るのですが、却々趣味もあり又他の裝

飾との調和も好いものであります。

然しそれも文人風の裝飾には使はれて居ますが、他の方面の裝飾には餘り多く用ひられませぬ、が、近來歐風の裝飾がボッ〳〵行はれるやうに爲つたために、盛花が……勿論これは純歐洲式の盛花が食卓の上や高卓の上に飾られるやうになつた爲か、段々と盛花といふことを人が氣に留めるやうに爲つて來たのであります、然しその純粹の歐風の盛花は、前にも云つた如うに餘りに濃厚りとして、紅紫絢爛とした派手なものであるに、その盛方も別にこれと云つた趣味も雅致もなく、唯々〳〵美い色取の好い奇麗な花や草を、無闇に挿して半圓形にした……丁度藥玉を二つに截つたやうな樣のものにするのであつて、一口に云ふと奇麗といふばかりのものですから、何れかといふと俗ッポク、濃厚いのである爲か、歐風の食卓上の裝飾用の外にはそれを使ふといふ人は極めて少いのです、……殆んど無いと申して可い位です。

盛花の再興

藥玉を半切せるが如し

勿論一向の俗物や趣味の何たることを解しない家庭では、時として歐風の宴會に食堂に使つた不用の盛花を持ち歸つて、それを床の間に据ゑて見る人などもないでもありませぬが、何分奇麗なばかりで、趣味も風韻もない嫌味なもので、到底も高趣な日本式の裝飾を施した座敷とは調和致しませぬ。

食卓上の殘花を飾る俗人

早い話が古法眼だとか、雪舟の描いた古畫や又は公任、定家などの歌切……それ程までゞなくとも、芭蕉だとか其角だとかの句入の文の掛物ぐらゐを掛けた床には、古銅器か青磁の花瓶に投入の花ならば如何にも調和が好いですが、若しそれへ、ダリアやコスモスやチューリップ、薔薇などをコテ〳〵と挿し交ぜた盛花を配つたらば如何でせう、モウ趣味は全く破壞されて了ひます、決してそれは習慣の上からばかりではありませぬ、實際全然調和しないのです、非常な俗物か趣味といふことを知らぬ人でない以上は、到底歐式の盛花をそのまゝ日本式に裝飾した床に据ゑること

濃味のある掛物と挿花

趣味の破壞

雅致ある盛花の再現の期近づけり

とは爲し得ないだらうと思ひます。

斯ういふ譯であるから、盛花といふものは日本式の座敷にはまだ廣く用ひられませぬが、然し古い時代の優雅な盛方をした盛花に文人式の籠盛を折衷した一種の盛花は……加之その盛方に意匠を加へて風情のあるものが出來たならば、恐くは又それが花瓶に代る時代が來るであらうと思ひます、全然盛花が花瓶に取つて代るといふことはないまでも、相並んで觀賞さるゝ時代は必ず近き將來だと思ひます、即ち今は丁度盛花が……一時霜や雪に逢つて、見る影もないまでに凋落して居たのが、一陽來復の氣運到來し、暖かい春の風に催されて今方さに清新の嫩芽を出さうとして居る時代であつて、盛花の爲には未來のある極めて樂い時期だと思ひます、將來この盛花が如何んな花を世の中に匂はするであらうか、氣高く優美な日本趣味の裝飾に相應はしい花が咲くか、それとも濃厚りとした歐化趣味の花を着くるであらうか、蓋しこれはその培養の任に當る挿

盛花の將來は挿花家の手一つなり

花家の手際如何に依ることであります。

盛花の趣味

盛花も趣味多樣なり

恐くは瓶花に遜色はあるまいと思ひます、瓶花の方に高雅な趣味のもの、優婉な趣味のもの、その外清楚なるもの、閑寂なるもの、幽玄なるもの、濃妖なるもの等、花の情味の千差萬別なる爲に各種各樣の風趣ある如くに、盛花の方にも亦極めて多種多樣の趣味があるものであります、單に歐式の盛花を見て、盛花は濃厚で稍もすると俗氣の勝つたものとのみ思ふのは大なる間違ひであります。

派手一方の盛方は風情なし

日本式の盛花私等が今日行つて居る所の盛花は、決して歐式の盛花のそれのやうに、澤山の草花を集めて……十種も二十種もの草花を花器に盛るといふ派手一方に偏倚つたものではありませぬ、二三種四五種乃至一種盛二種盛といふ極めて短簡な挿方もあります、例之ば春季ならば

風情ある四季の盛花

梅に椿に水仙だとか、或は牡丹と藤の二種盛、又時としては福壽草の一種盛などゝいふ氣の利いた盛方をするのです。

又夏であれば撫子と百合花と薔薇、或は松に忍冬だとか、鐵剪花と夏椿などか、若しくは松と紫陽花の二種盛、然もなくば山百合の一種盛などは尤もその趣味が清高に見えまする、それから秋には木芙蓉と水引草と女郎花か、百日紅と松とサフラン、或は龍膽と黄蜀葵と地楡、菊花と松の盛合などは總て趣味があります、又冬季の盛花で風情のあるのは葉牡丹に茱萸砂苔と寒菊の盛り交ぜ、それから山茶と殘菊と松、南天と乙女椿などで、殊に美はしいの寒牡丹の一種盛りでありまする。

何れの場所にも飾られる盛花

今いふやうに二三種から多くて四五種の花を盛つて、加之もそれを盛るのに趣味のある意匠を以てするのですから、實に風情のある氣高い盛花が出來て、日本趣味の座敷の裝飾としで……これを床に据ゑても又床脇の違ひ棚などにならべても、文机や高案の上に飾つても、何れも好い調

和の飾り物となるのです、然も又それを歐式の室内裝飾としても、時には彼の濃厚的のそれよりも遙に能くその裝飾と調和を得ることがあります、畢竟りそれは盛り方の巧拙……いはゞ意匠の雅俗如何に外ならぬのであります。

如何なる器物でも花を盛ることを得

盛花器

昔の盛花、卽ち奈良朝時代に行はれた盛花には、前にも申した如うに其花器が定つて居つて、華盤か花盆か然もなくば鐵鉢形の銅器や漆器に盛つたものであります、又歐洲風の盛花には、盛花器といふ定つた式のものがありますが、然し、私達の行る盛花は、器は何でも構ひませぬ、例の昔時用つた華盤や花盆は無論のこと、歐風の盛花器でも、その花とさへ調和すれば構はず使ひます、その外如何なる器物でも扁平な、盆形のものでさへあれば、形は方形、正圓、楕圓形、長方形、何んな器でも少しも去り嫌なく使ふの

器の形は方圓何れにても可なり